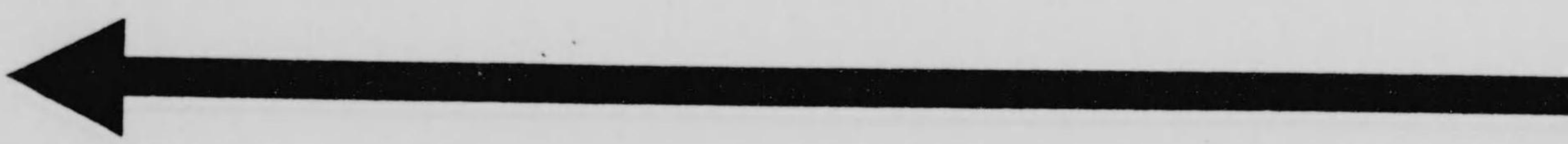




363
258



始



963-258



伯内閣總理大臣 寺内正毅題

海軍大學校長 佐藤鐵太郎序

貴族院議員 江原素六序

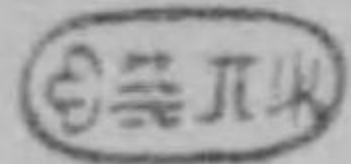
三坊道人著





正教類

師傳



序

人間の眞價は棺を蓋うて後定まる。同時に人間の發揮する威力も死後でなければ肯定することの出来ぬものと思ふ。一生涯中の瞬時の閃きに對して、眞にそれが徹底したる威力であるか、否かの斷定を、直ちに下すことは至難である。

尊氏の活動は實に花々しきものがあつて、相當の威力も發揮されたかの觀があつたけれども、死後今日に及んで彼は踏んだり蹴たりの憂き目に遭ひ、威力の反響どころか、殆ど型なしに爲つて仕舞つた。正成の活動は寧ろ當時に於て、尊氏に比す

れば失敗の方であつたけれども、史を通じて彼の威力を認むるならば、その量は漸次増大し、殊に維新前に於ては百千の小正成を出して回天の業を遂げしめた。維新の大業は、その内容より見る時、正に楠公の威力生活が之を成就せしめたものとも謂ひ得るであらう。尊氏の威力が年と共に幻滅し去るに反し、正成の威力は愈々光揚されて、窮まる處を知らない。

人間本來の生命が久遠の往より金輪未來際に亘れるが如く、人間の發揮する威力も三世を貫いた長久のものでなければ、眞に徹底したる大威力と云ふことは出来ない。源遠ければ流れ長し。根深ければ枝繁し。人格の根柢に横はる久遠的生命を自覺することに依つて、人はその面目を新にし、威力の透徹を期し得るのである。

西洋には種々なる方面に威力主義者が現はれて居つて、或は宗教的に、哲學的に乃至科學的に、文學的に、政治的に、風雲的に、種々なる形を以つて威力を揮つた

ものはあるが、我等の見る處では未だ曾て眞に透徹したる威力者ありとも思はれない。時代の陋習を打破し、若くは他の學説を論破して、一時的に聲價を恣にしたる威力者は尠からざる處であるが、時間と空間を超越したる久遠的生命を有する眞威力は到底認めることが出来ない。一時的、流行的の威力は線香花火の威力である。暗夜に線香花火を點すれば、確かに瞬間の威力は認められる。併しながら是れには永き生命がない。

奇を以て人目を眩し、一時的、流行的聲名を博することは容易に何人にも爲し得る處である。試みに赤色のシルクハットを冠りて群衆の間を横行して見よ。群衆は爲めに驚異の眼を瞬つて彼を喝采するに相違あるまじく、彼はこの瞬間に於て一種の威力を發揮し得ること請合だ。乍去、それは線香花火である。

『威力生活論』は古今東西に亘つて各種の威力を探究したものである由、威力の徹

底觀フに於ては恐らく予の見る處と一如したものであるかと思ふ。フ

佐藤鐵太郎

序言

人格には威力あることを要し、人生はこの威力の上に立つべきものであると云ふが、威力の純粹なるものは決して腕力でなし、又所謂權力でなし、勢力でもない。是等の力は強ひて作り、強ひて出す力であるから、對抗的、比較的のものであつて自ら限界が定まつて居る。眞の威力は無限であり、絶對であつて、他の如何なる力を以てしても、侵し難き尊嚴が此の中に存するものでなければならぬ。

如何にして、然らば此の威力を得べきかと云ふに、何等の技巧も權略も要らない。フ

唯、修養修言によりて、人格の根柢を不動のものとし、徳を積むで惑六はざるに到ればよい。荀子の所謂『君子至徳、故嘿然而諭、未施而親、不怒而威』とはよく威力の眞諦を示したものである。

何ものか據る處あつて、不動の精神を有つて居れば、外來の如何なる壓力を受くとも誘惑に逢ふも、人格の中心には何等の反應もなく、意に任じて進むべき方向に進み得るのであるが、是れなきものは所謂浮萍生活で、風のまにまに動搖常なきものとなる。政治家が動もすれば黄金の威力に支配せらるゝが如き、若くは青年學生が往々にして一婦人の魔力に魅せらるゝが如き、皆これに打ち勝ち得るだけの眞威力を有つて居らぬからである。人格の中心に難攻不落の城を築いてないからである。不用意に生活してゐるからである。

『威力生活論』は凡らゆる方面に亘つて威力の研究を試み、威力生活上の代表的人

格を數多品隨して居るが、その最大なるものを信念の上に發見したことは甚だ我意を得て居る。げに信念から出る威力ほど強大なものはない。英雄の勢力を擯くこと必ずしも困難でないが、一匹夫の志は奪ひ難きものである。三生坊君曩に『大日本雄辯史』を著して大いに雄辯威力の紹介を試み、今又威力の總勘定を爲す。續いて君が筆の威力を倍々發揮されんことを望む。

江原素六

自序

◎ 開かずば扇も風の蓄かな。收めて之を出さざれば、人間内在の威力も、開かぬ扇の風で、清涼の味も知るに由なき處なれど、發して空を煽れば、雲を起し雨を呼ぶの風とも爲る。

◎ 愛人を捉ふるも威力である。敵國を屠るも威力である。世界を統ぶるも威力である。乃至萬人の怨恨を買ふも威力、萬人の渴仰を受くるも威力、擒縦殺活皆威力に隨ふ。

自序
◎ 所詮人間は威力の上に活くべきものである。然らば何を以てか威力生活の眞諦と云ふ。われ今眼を東西に晒し、想を古今に走らして威力の總勘定を爲し、求むる處のものを得んと欲す。

大正六年五月

著者識

威力生活 目次

一 威力の研究……………二

一 風雲的威力……………二
民衆は強者を讃嘆す——ナポレオンの威力主義——矢張り只の人間也——奮闘生活の趨嚮

二 輿論の威力……………三
輿論威力の内容及形體——輿論の威力と天才の猛志——吾國輿論威力の研究

目次

一

三 金権の威力……………元

蓬萊山も目のあたり——金は人格を製造す——金権威力と社會主義

四 科學の威力……………三

精神界を威壓し去りぬ——世界を恐怖せしむる獨逸の科學

五 信念の威力……………六

英雄の弱き半面——ソクラテスとルーテル——火も焼くこと能はず——完器は水を漏らさず

二 威力生活……………夫

一 ニイチエ論……………六

彼は如何なる人物なりや——強者道德の主張——月並道德に對する諷刺

二 トライチケ論……………八

獨逸魂の原動力たり——人民に聽く必要なし——彼は現代獨逸の母也——カイゼルの威力生活

三 オイケン論……………九

精神生活とは何ぞや——眞如の都近くして遠し——溺れんとするの努力——彼等は皆只の人間也——大精神生活の提唱——無明を切るの利劍——奮闘生活の哲理

三 大威力生活……………一三〇

一 基督論……………一七〇

本舞臺の生活に入る——共鳴者五億六千萬人——今より我を見ざるべし——基督は弱者の友なり——眼前寸地の平安

二 回祖論……………一四九

彼の威力も大威力也——天堂は劍の影にあり——絶對的權威の自覺——マホメットの奮闘生活——名利の外に超然たり

三 日蓮論……………一五九

日本佛教と威力生活——日蓮の威力的修養——法敵に對する威

力——信徒に對する威力——權力に對する威力——國家及世界に對する威力——佛神に對する威力——威力生活と甘露の涙

四 妄動威力生活……………二二五

一 虚勢威力運動……………二二五

虚勢應用の借金術——傲語と盛裝と交際費——政治家は吾輩萬能——誇大妄想病蔓延

二 自我發展論……………二二九

生きんとするの努力——生の力と其の追求——東洋に論じ盡されたる思想



威力生活

三生坊道人著

威力生活 目次終

目次

三 怪力亂神論……………六

物質科學の原則破毀——神と佛と貧乏華族——利根と通力には依るべからず……………三三

五 結 論……………三六

活動する人と動搖する人——威力生活の眞諦……………三六

一 威力の研究

一 風雲的威力

民衆は強者を讃嘆す

獅子一嘯すれば、百獸黙す。彼は強者にして、その聲に威力あり。此は弱者にして、その聲に威力なきが故である。威力なきものが威力あるものゝために壓せらるゝは萬類の常態で、力の對抗上動すべからざる原則と爲つて居る。

ニイチエをして言はしむれば『善とは力也』で、力そのものを以て直ちに善と見る。

而して『力の増大』が直ちに幸福であると、頗る徹底的に力の尊嚴を認むるのであるが、善即力の説を、究竟の眞理と見做すべきか否かの問題は茲には論議するを要しない。唯我等は力の對抗上、強者が一時的に弱者を征服し、若くは恒久的に強者の威力を維持するの事實を知ると同時に、歴史は常にこの事實に對する保證人と爲つて居るものであると云ふの確認を得れば足る。そして英雄は一時的に弱者を征服して、強者の威力を示した處の、非凡の人間であると云ふとに決めて置きたい。恒久的に、絶對的に、その威力を維持し得る處の『大威力』を、所謂英雄に於て認めんとするとは、その希望が餘りに大き過ぎる。この約束に對しても亦歴史が露骨に立證してゐる。

『風雲的威力』とは則ち英雄の威力を云ふ。若くは英雄に類似したるものゝ威力をも指してこの名を與へて見たいと思ふ。英雄の出現は風雲的であつて、氣壓の加減が風を起し雲を呼び、草を靡かし、浪を蹴るやうなもの、即ち一時的異常の現象を示すも

のである。長へに雄觀を止めて國鎮的權威を示す處の富士や、常住の輝きを以て六合に照臨する太陽のやうなものでは決してない。語を換へて言へば、英雄の發揮する威力の大いさには自ら限界がある。

即ち限界ありと雖、兎も角も英雄は非凡の人間で、民衆を壓し去るだけの威力を體現する處の偉器である以上、人間の社會を研究する場合には勿論重要な一標的とせねばならぬ。

『一人を殺す者は悪人と爲り百萬人を殺す者は英雄と爲る』とはボルシヤスの鐵案であるが、史上に現はれたる英雄は、如何にも東西軌を一にして『百萬人を殺す』的大犯を遂げたものである。大犯の前には法律の權威が喪失するものと見えて、法官の調書を超越したる最大犯人と爲れば、罪は必ず免れてゐるのみか、民衆及國家は手を拍つて彼を讃嘆するが常例と爲つてゐる。仔細は佐藤一齊が言ひける『人間第一等の事』を爲

す者には、第一等それ自身の善惡に拘らず、低級の事を爲して小善小惡を算へらるゝ者とは異り、大事遂行の前には何等かの大なる理想を有するもので、私慾を超越して痛快事を敢てするから、法律を以て蒞む餘地が発見されないと云ふことに依て分る。

英雄の典型は言ふまでもなく一世ナポレオンである。歴山大王も英雄である。カイゼルが黃禍論を唱ふるに至つた一理由に當る成吉思汗も英雄である。漢の高祖も楚の項羽も英雄である。賴朝、高時、尊氏、信長、秀吉、家康等も勿論英雄である。幕末の風雲兒連も一種の英雄、海賊から身を起して明末の風雲を捲いた鄭氏も、二十五歳の書生を以てして一たび獨立政府を建設し、自ら大統領の重任に當つたアギナルドも、四百餘州を大渦亂に陥れた孫文、黃興等も、乃至世界征服の空想裡に、列國の膽を冷やしたカイゼルも、皆これ一種の英雄であつて、風雲的威力を存分に發揮し得たる非凡の器であるが、今は英雄史傳を試むる場合でないから、個々の英雄を拉し來つて一々品隋するを避

六
け、中に就て典型的英雄の價值あるナポレオンに對してのみ、少しく威力的研究を爲して見たいと思ふ。

ナポレオンの威力主義

フランスの青年が、一齊に民政主義に傾き、自由、平等、友愛を以て彼等の旗印とするに到つた頃、その炎々たる革命的空氣の中にナポレオンは男と爲つた。そして彼も亦心から民政主義の方へ傾き、又その自由、平等の甘き夢を夢みつゝあつたのであるが、彼の心酔は決して盲目的雷同ではなかつたのである。彼は民政と云ひ、自由平等と云ふものゝ中にも、嚴然として侵すべからざる權威の樹立を必要とした。統一は威力の下に在るべきものと信じたのである。是の故に彼はパリの市街戦でも、政府の權威に反噬して來る民衆に對しては、大砲を差し向けて之を威壓し去つた。民衆の咆哮し來るに任せて

飽くまでも寛容の態度を示し、無意義なる迎合を試むることの甚だ危険なるを感じたから、彼は統一節制の機能を『威力』に依て表示したのである。

彼は自己を信じ威力を信じた。大事は威力主義に依てのみ完全に遂行さるべきものと信じ、而して自己の全能は只威力その物でなければならぬものと信じ、而して自己が威力の權化である如く確信して居つた。威力の尊嚴を認むる彼に取つては又輿論なる民衆の聲は頗る薄弱なるものであると信するが自然の數で、この薄弱なるものゝ上に自己の威力を樹立することの愚なるを感じたのも當然だ。彼が伊太利と奧太利を破つて、その光榮に輝く戦捷を一身に齎し、揚々として凱旋した時、民衆は凡ゆる歡迎の準備を爲して狂せんばかり彼を讚美したが、彼は民衆の歡聲を冷然として聞き流し、殆ど心に介しないやうであつた。怪しみ問ふ者に對しては、彼が個性の威力を滿面に漲らしつゝ『淺慮なる彼の群衆は事情一變せば今日と同様の狂熱を以て余を斷頭臺上に送るもので

あらう』と云つた。彼は輿論の價值、群衆心裡の權威なるものを殆ど浦風に噪ぐ波くらゐに考へてゐる。その波の上に自己の位置、地盤を築くは尙砂上の樓閣に等しと思へるものであつた。

彼は徹頭徹尾人材本位であつた。時代は所謂輿論に依て動くものではない。歴史は所謂群衆心裡に依て轉回するものではない。只天才と猛志とに依て開展すべきものであると彼は信じて居た。完全なる輿論は民衆の一致したる聲でなく、天才の指導に對して民衆が共鳴したる現象に外ならぬものである。民衆の俗論が詩人の作と爲るのではなくして、詩人の傑作が民衆の口に論はるゝものである。無意味なる文字の集積は文章を爲さないが、名文章に列なる文字は悉く生きてゐる。投票の總計必ずしも人物の價値を定めざれど、人材を出したる投票は悉く有意義と爲る。彼は個様の確信を有すると同時にその配下にも頻りに人材の拔擢を試みた。彼の人材本位は頗る徹底してゐる。即ち直ち

に是れ威力主義の發揚である。

彼は人材本位、威力主義を信捧すると同時に、又その威力の發揮は偶然に出づるものに非ずして、努力奮闘の薪を積んで始めて強き火焰を上げ得るものであることを信じ、而して常に之を實行して居つた。塙軍を破つた時の一理由として彼は自ら自己の努力の功を語つたことがある。曰く

『余は敵將よりも四時間早く起きた、塙國人は時間の價値を知らない、故に余は彼を撃破することを得たのである』

彼は敵將よりも早く起き、而して敵將よりも遅く寝ることを以て戰捷の一條件として居つた。時としては彼は一睡をも取らぬことさへあつた。若くは一食をも取らぬことさへあつた。不眠絶食の努力も彼に取つては差して苦痛でも無かつたらしい。

彼はよく奮闘しよく威力を發揮した。そして人を動かすの二大方法としては利益と恐

怖とを擧げてゐた。勿論恐怖の方により多く重きを置き、敵を恐怖せしめ時には味方も恐怖せしめつゝ、自己の猛志を發揚するに怠らなかつたのである。人を恐怖せしむるの術、即ち亦是れ威力主義でなければならぬ。威力發揮の手段として取るに足るべきものは、彼の見逃すことの出來ぬ處であつた。彼は恐怖を與ふるの術を知ると同時に、利益を喰はすの術をも發見して居つた。利を喰はして敵手の自由を奪取する、夫れも亦黄金の威力を利用したに外ならぬ。彼は人間の弱點に乘じ黄金の威力を利用したる事實に就て、自ら左の如く傲語したことがある。

『人は黄金を餌とする豚である、余若し黄金を彼等に投與せば、余の意の如くに誘ふことが出来る』

彼は斯の如く人間の醜なる半面を看破して、人間を侮蔑し人間を支配したのである。彼は正直者であつた。故に彼が自己の信ずる處である以上、他人を豚の如く輕侮した感想

を語るに、毫も遠慮することを知らなかつたと見える。

彼は人間を侮辱し、人間を殺戮し、人間を塵芥の如く取扱ひ、而して民衆の怨みを買ひ、民衆の反抗にも逢ひ、之を鎮壓せんが爲めにはその手足を縛しその口を閉すことも敢てし、彼等の自由を奪取するに何の遠慮も無かつたから、威力主義は動もすれば單なる自我發展の暴君である如く見えたけれども、而も彼にも或る理想があつた。威力の上に押し樹てた國土の嚴淨を期待して居つた。ニイチエの所謂「超人」的自覺を以て人類の上に一段高く止まり、最大なる威力に依てその理想を現實すべく勵みつゝあつたものである。彼が凡ゆる横暴を逞うしたかの如く觀ぜられたにも拘らず、彼自身一點の私心なかりしことは、その自ら聲明した處の告白に依ても察せられる。彼はエルバ島に在つた時、特に力を罩めて斯の如き述懐を爲した。

『余は余の生涯を通じて未だ余の個人的損害に復讐したことがない』

善い哉言や。『余の個人的損害』を問題としたとがないと云ふ以上、彼の生涯は彼自身の生涯ではない。或る理想を趁うて茲に到達せしむべく、民衆と國家とを引き摺り廻した處の公的生涯を送つたものでなければならぬ。『百萬人を殺』しても彼が犯罪人として取扱はれなかつた理由は茲だ。若し『私心』ありとし、又は所謂自我主義の發展のための努力であつたとすれば、我等は姑らく彼の自我主義をも宥さん。歐羅巴を吾が物とし、東洋をも吾が物にせんとし、更に地球上の凡ゆる障礙を排除して、渾然統歸し、吾が威力意志の下に存分の支配を試みんとせし彼の慾望は、自我發展の要求であるにしても宜しい。ケチなる『生存慾』や劣情満足のための低級な自我主義ではなく、個人的損害の復讐でもなくして、喃喃れ男らしき大慾であるのだから、彼に限つて恕し得る。彼は飽くまで統一の理想を描いてゐた。そして熾烈なる統一慾の前には殆ど善惡の觀念を離脱してゐた趣きがある。彼は同時に自己の威力を確信し且つ尊重して居たから、統一の希

望も必ず爲し遂げらるべく獨り期待し讚嘆して居つた。

『一人の悪しき大將は二人の善き大將に優る』

の一語、彼の正直なる告白ではないか。

人間は勿論皆生きてゐる。乍去、彼が如く強く生き、男らしく生きてこそ、眞に『生き効ある』人と云ひ得るであらう。後世の人——ナポレオンの後に生れた人——にして、胸底風雲の氣が生じたものは皆彼を以て師とするに足る第一人者と仰ぎ、彼の言行録は凡ての風雲兒の聖典と爲り、彼の風采は殆ど信仰の標的と爲つた。三軍を叱咤するにも彼の聲を聯想し、少年を鼓舞するにも彼の威力を籍りる。彼は唯の人間では無かつたかと思はるゝまで、強き讃仰を後人に博し得たのである。即ち彼の威力は彼の生涯に於てのみ發揮されたのでなく、長き歴史の上に彼の威力生活が現實されたやうに思はれる。

矢張り唯の人間なりけり

個性の發展としては蓋し十二分の威力を發揮し得たナポレオンも、唯の人間で無かつたか否かと云へば矢張り唯の人間としか思はれない理由がある。

ナポレオンが唯の人間として我等を首肯せしめた最も顯著なる事實は、彼のセントヘレナに落魄した時の表現である。「豈我を惱ますアルプスあらんや」の意氣込、彼にイムボツシブルのあらう筈は無いのであつたが、それは絶對的の斷案にはならない。セントヘレナはイムボツシブルの結果である。無かるべき筈のイムボツシブルが彼の身上に反證された。唯には、彼の惱みは到底アルプスどころの問題でない。彼自身全部の問題である。死に勝る惱みである。

『あゝモスコで戦死すれば可かつた。それともウオータルーで寧ろ僕を仕舞つた

ら、何んなに幸福であつたらう。いや、ドレスデンの時ならば尙更、否々ポロチノの方が一層好かつた！』

こんな惱みがセントヘレナの生活を支配してゐた。哀傷と悲憤、それが生活の殆ど全部であつた。躍動と歡喜を以て馬上生活を過して來た彼が、今この悲痛を味つて、侍者を怒り、英人を怨み、天を罵り、セントヘレナを怖れつゝ、怪しげな光を孤島の波間に眺むるナポレオン！セントヘレナの波に映る月はアルプスの雪に反射した月に相違なく、配所の庵室に懸けた劍は大皇帝即位の日に下げた劍に相違はないのであるが、月や劍や、今は孰れも彼の運命を呪うて居る。脱ぎ棄てた帽子は惡魔の首のやうに見える。

『あの時に埃及へ行つて、歴山大王の覇圖の如く一大帝國を出現せしめたかつた』

『英國と云ふ奴がなかつたら、自分は東洋の皇帝とも爲り得たに違ひたいのに！』

『假令やり損つて何處で仆れたにした處が、このセントヘレナには優つてゐる』

追憶と悔恨は彼の強い意志と反比例して、いよく深く強く爲るのみであつたが、彼は之を制することは出来なかつた。否、制しようとしなかつた。頭の熱蒸するまで常に彼は彼自身の經驗を計算し、彼自身の運命を評價して居たのである。

一八二一年五月五日は最後の悩みを感じた彼の悲劇の日であつた。病状は最早「追憶」さへも容さぬ態に陥つたので、彼は強ひて考へようとしなかつたらうが、苦悶の中に現はれたる「猛志」と「熱情」とは尙且彼の個性を遺憾なく發揮したのである。彼嚙語を發して曰く

『フランス！軍隊！ジョセフィン！』

フランスは再び彼の命に動かす、軍隊は再び彼の前に集まらず、ジョセフィンは再び彼の手を握らぬことは定まつて居るが、彼は臨終の刹那に及んで尙この語を繰り返さなければ已まなんだのである。氣息絶えんとする瞬間に於ても、彼は寢臺から躍り上り、

之を鎮めんと近寄つた人を押し倒して、威力意志の結論を告げたと云ふ。この意味に於て彼の威力生活は頗る徹底してゐる。が何處までも矢張り『人間的』であつた。

奮闘生活の趨嚮

ナポレオンの奮迅的生活が歐洲の人心を或は戰慄せしめ、或は勇躍せしめ、更に隨喜せしめたのみならず、米國民も東洋人も一齊に彼を研究し、彼に依りて鼓舞し、而して彼を模倣するの傾向を示した。彼以來未だ彼の如き人物——尠くも彼に近適した人物——を發見し難しと雖、彼の一部を體現し、活躍せしめたものは必ずしも皆無でない。

米國に於ては『奮闘生活』の名に依て異常の努力を試みられ、相當の威力をも發揮されつゝある。米國は自由の國である。自由たるが故に競争は徹底的に行はれる。自由競争の名は今や聊か陳腐の嫌ありて、少しく高調に感ぜしむる『生活の戦』と呼ばれる。

に至つた。生活の戦場に入は起つてゐる。敗者は社會の下積みと爲りて、萬事が拘束と壓迫の裡に葬り去られるに反し、勝利者は一躍して金權の王者と爲り、若くは政權の主宰と爲り、自由平等の美名の下に威力的階級は手もなく割せられる。勝利者たらんことは全米國民の希望であり、理想であるやうに爲つた。戦はざるべからず、生きざるべからず。奮闘生活は應て威力生活を生む。下積みより身を挺して上積みと爲り得る。

ルーズベルトは奮闘生活の代表的人物か。彼が其の天才と猛志とを『生活の戦』に發露してより幾もなくして、勝利者と爲り、白聖館の主人公と爲り、社會の上積みと爲り、政權の主宰と爲り、世界的地歩を占むるに至つた。そして彼自身の信念から出て、勝利者の威力を金權に向つて加ふるの必要をも認め、彼の所謂金權征伐をも斷行された。金權は動もすれば政權を擒縦し殺活して、政治の精神を腐敗せしめ、政權の威信を疑はしむ。金權は又社會の不自然なる階級を劃して、非金權者をして其の壓迫に堪へざらしむ。

獨り非金權者、勞働者、平民のみならず、國民の支配權をも動搖せしむるの威力ありて、政治の威力を蹂躪し去ることあるは敢て珍らしきに非ず。ルーズベルトはこの禍あるを知つてゐた。彼は乃ち政治の威力を以て金權の威力に對抗し、惡戰苦闘最も克く力めたる結果遂に夫れに打ち勝つことを得、或る程度までは金權を撃破した。そして中央政府の權威を具體的に示して、自己の地位をも堅固ならしむるを得たのである。

彼は彼自身の信念から出た一種の旗幟を以て居た。彼は盛に『正義』を振り廻した。『人道』を鼓吹した。そして『理想』を仄めかした。自己の政策を主張するにも、反對黨を攻撃するにも、金權征伐をやるにも、常に正義、人道、理想を振り廻すのであつた。彼の雄辯も殆ど正義、人道、理想の連鎖であつた。彼の理想が如何様のものであつたかは姑らく問はず。只彼が斯様にして錦の旗を押し立て歩きたる結果、その向ふ處に彼の威力をより多く強く美しく感覺せしむることを得、同時に一般國民に對して深き政治趣

味を興へる事をも出来た。米國民が今日あのやうなる政治狂と爲つたに就てはル氏の鼓舞煽動が最も力ありとさへ言はれてゐる。

『起てる農夫は座せる紳士よりも高し』活動だ奮闘だ。大いに活動し大いに奮闘し、生活の戦場に勝利の榮冠を得よ。勝利者の生活は威力に生きてゐる。と、斯様に全米國民の思潮を動かすやうに爲つたから、目的の遂行に對しては又頗る急進的に傾く。元氣も旺盛に爲るが、又甚だしく焦慮する傾向もある。彼等が汽車に乗らんとすれば、時間の間際まで奮闘生活を續けつゝ、その精力を他の方面に注ぎいよ／＼發車の數分前に息をはずまして駈け付くるが常習と爲つてゐる。或は發車後これを追つかけて飛び乗るものさへあつて、法規の寛なるに乘じ、冒險的の所作を茶番事の如く行ふ。中にも極端なるは、或る婦人奮闘家にして、汽車に乗り遅れたるを遺憾とし、近徑を自動車にて急行し列車の前方に現はれて自動車を軌道に横へ、已むなく列車を停めたる刹那之に飛乗の目

的を遂げたものさへある。奮闘生活も茲に至つては活動寫眞的生活と云ふべきものに爲つて居るが、兎も角も克く彼等は奮闘する。間斷なき奮闘、その効果は確かに『座せる紳士』より一段高き權威と爲るに相違なく、努力の結晶は何物か一つの天爵と爲つて酬いらるゝことは疑ない。

奮闘生活は獨り男子のものではない。婦人社界に於ける生活の形式も殆ど男子と擇ぶ處なき迄緊張して來た。米國婦人は今は『我等の従事せぬものは兵士と消防夫のみ』と爲り、空中飛行にさへ参加するに至つたのである。ウキルソン大統領再選と同時に婦人の代議士を選出するに至つた位だから、彼等は亦政治生活の上にも男子に對抗せんとするの意氣込あるを證明してゐる。『女子二十にして室に入る』どころか、外へ外へと藻掻いてゐる彼等婦人の奮闘生活、それが全社會の上から見て是か非かの問題も自ら起つて來る。我等は關り知らない。

奮闘の功を積んで水平線以上に出で、それだけの威力を示し得るに至れば、彼は社會から歓迎され讚美される。否らざれば假令名門貴族の出なりと雖、眼中に措かれぬ。實にヤワシントンの家族は殆ど米國民に忘れられ、輕んじられてゐる。

我等は米國民の奮闘生活を賛成す。乍去、彼等の胸を割つて、其處に『人生の根柢』を有するや否やを検する時、憮然として失望せざるを得ぬ。彼等の理想とはモンロー主義か、侵略主義か、黄金萬能主義か、お祭り騒ぎか、將た又ル氏の所謂正義の勝利か。是れ亦姑らく疑問は疑問のままに貽しおかん。只風雲に御して一代を風靡し、奮闘生活の權化とまで仰がれたるルースベルトが、白聖館裡一朝の夢今何處に遊離してゐるか。そして米國民は彼の時と此の時と同様に、彼の個性に對して敬意を拂ひつゝありや否やを聞いて見たい。

二 輿論の威力

輿論威力の内容及形體

『民衆が或る問題に對して行ふ團體判斷』が即ち輿論であるならば、輿論の主體は個人が集積であるから、其の單位なる一個人の意見よりも團體の判斷の方強き威力を發し得るは當然である。其處で輿論的威力の研究が必要になつて來る。

判斷を下すことが先づ必要だ。然らば輿論は智的のものでなければならぬが、單なる智の働きのみでは輿論は決して有力のものと爲り得ない。目的に向つて突進せんとする意志も必要であり、理想を憧憬し若くは利益を趁ふて已まざる慾望、乃至反對者に對する敵愾心の勃發等、感情の助勢が極めて有力のものと爲る。中にも感情の強弱は輿論を

のもの、強弱に最も影響する處が大きい。感情に乏しくして、問題に何等の興趣も起らず、勝利の榮譽も想はず、冷然として智的判定のみ試むるやうな場合には、例へば輿論は尙起り得るにしても、夫れが威力的價値を認むるに足るものとは斷じて爲らない。感情の後援は頗る必要なものである。乍去、感情的により多く走り過ぐる場合ならば、その無意味なる盲動に終るが、或は有害なる暴動に變じて、目的を度外においた脱線的のものと爲る。脱線した輿論に其の形體が相當に大袈裟なものであつても、尙強き威力は發揮し得ない。一種の威力を發揮することありとも、瞬間の爆發的威力で、透徹したる威力とは爲らない。煙火ならば口開きの爆音で、冲天に轟く大音響とは爲り得ない。輿論は批評的と爲つて現はるゝものであつて、發して動作となれば建設的と破壊的の兩方面を有する。そして破壊的の出づる場合が最も多く、又その威力も破壊の場合に於て特に強く反響するものであるが、破壊の裡には必ずや建設の準備なかるべからずし

て、破壊即建設と見らるゝ場合が又最も多いのである。破壊であれ、建設であれ、輿論なるものは、その威力を發揮する上に於て、特異の長所を有してゐる。速成簡便、短刀直入的に問題を決し、若くは時代を轉換し得ること即ち夫れである。法律の如きは、其の成るや一旦一夕の業でなく、且つ之を施行する上にも相當の時日を要するものであつて、威力の發揮は緩漫であるが、輿論に至つては然らず。所謂逐波のものであつて、時に應じ、事に隨ひ、即斷即決、大勢を利那に回轉し、去就進退を瞬時に決し得る底の應病與藥である。

輿論の威力と天才の猛志

輿論の威力は個人の威力よりは強かるべき筈であるが、這は尙理論的である實際の上
に於て輿論は恒に個人の力に勝ち得るや否やは大いに疑問とせざるを得ない。現に立憲

國の政府にして多數の希望に反するものが出現したり、乃至多數の好まざる戦端を開いたりする場合も往々あつて、或る傳統的勢力若くは專制的暴君のために輿論の威力を蹂躪されることも尠くない。

尠くも輿論なるもの、成立する前には、先づ個人の優越せる意見と指導があり、之を中心として民衆が共鳴し來る時に於て始めて團體的威力が生ずる。その成立に種々なる場合がある。(一)其の社會の人が凡て優等なる場合(二)少數者が優等にして他は單に理解力を有する場合(三)少數の優等あるのみにて他の多數は理解力さへもなき場合(四)凡てが劣等なる場合等種々であるが、(一)の如き優秀の場合は特殊團體の外殆どない(二)の如く少數優等者の下に多數が判断力だけを有する場合、これが一番多しと一般に言はれて居るやうだが、親しく事實に就て觀察すれば、或は(三)の多數者が理解判断を有せざる衆愚にして少數の優等者に意の如く引き摺り廻さるゝ場合が多くは無いかと云

ふものもある。(四)は元より問題にならない。

第三の場合が果して多しとすれば、輿論とは或る先導者に追隨する衆愚の喝采に過ぎぬものと爲つて仕舞ふが、ナポレオンが民衆の歡迎を冷笑したる如きは正しく此の觀を爲して居たものに違ひない。今度の大戰勃發に於ても、獨逸の絶對的非戰論者がカイゼルの猛志に威壓されて、一齊に戰爭を謳歌するやうに爲つたのは、假令彼等に理解力は有り得べしとするもの、より以上の個人的威力の前に起つては皆盲目と化し去るのでは無からうか。斯の如きは多數の理解ある場合に屬するものであるけれども、威力の前に理解の機能を喪失すれば矢張り、第三の場合と同一視されても仕方は無いのである。壓制の下に行はるゝ輿論は不自然なるものであるから、などと言ふことを止めよ。眞劍の輿論は、其の主張の前に何等の障碍あるべき筈がない。恐怖に依て其の説を一變するが如きは尙愚者の分際である。已むなくんば一時沈黙して捲土重來の準備をして居るも宜

しい。爰ぞ自己を欺き主義を一抛して、その反対を謳歌するの愚を爲すべきぞ。この意味に於ては彼の精神生活論を以て一時名を爲したオイケンの如きも賢に過ぎた愚者の部類に加へられても申譯があるまい。彼は大亂の恐怖を感じたか、但しはカイゼルの威力に壓せられたか、その所謂『自分自身の根柢そのものを得んとする絶間なき戦闘』を續けるよりも『英國は憎むべし撃つべし』の方に傾き、『戦闘』が悪文明を征服するの戦闘に非ずして、悪文明を増長せしむるの戦闘に加擔し謳歌するに至つたオイケン、友邦の同胞を呪ひ始めたオイケン、それが彼の『神性』の偽らざる聲であらうか。

少々餘談に走つたが、輿論は所詮個人の鼓舞、指導に隨順する團體の聲でなければならぬ。多數が同時に同様の聲を發して、偶然なる輿論を發する場合もあり得るが、多くは先覺者、先導者、乃至煽動家等の強き者に動かされて、之を理解し謳歌し共鳴するやうに爲る。語を換へて言へば天才の聲に民衆が呼應するのである。詩人の作が俗衆の諷

誦に入るのである。

歴史は我等の觀察に裏書してゐる。歐羅巴に於て自由、民権、平等、革命等の空氣が漲るやうに爲つたのは、偶然なる民衆の輿論が突發したためでは斷じて無い。曩にはルソーあり、ミラボーあり、直接指導者としてはダントンあり、マラーあり、ロベスピエールあり、而してナポレオンあり。米國の獨立も決して突發的變革ではない。ヘンリーやワシントンの天才が不斷の血叫に依て民衆は動き出すやうに爲つたのである。社會黨が獨逸の政治舞臺に於て、あのやうな勢力を爲すに至つたのにも、強ち資本家の横暴が産んだ現象ではない。ビスマルクを屢々閉口せしめた青年志士フェルチナンドラツサルが血を吐くやうな赤熱の辯を揮つて、當時の理論的社會主義を本物の政治問題に押し上げた、その努力を記憶しなければならぬ。支那南方の烏合の衆も、孫、黄等を得て始めて有意義なる『民衆の聲』を發するやうになつた。維新の大業から東湖、松蔭、象山、南

洲等の天才と猛志とを除いたら、果して何んな結果を生み出したであらう。民権史上から板垣、後藤等を抹殺したなら、果して何んな自由が認められるであらう。勿論ルースもナポレオンも、南洲も板垣もなきものとした處が、熱せる時代には自ら民衆の心が或る方面に變移せんとするの傾向はあるものである。乍去、心の傾向、希望の一致が必ずしも時代の轉換を遂げ得べしとは思はれない。或る理想を憧憬する民衆の心が散漫區々の形にして、何等の統一、秩序をも見出すとなくんば、之を憧憬するは單なる憧憬に止まり、之に達すべき道を拓き得ないから、希望の熱度高まれば高まるほど夫れが苦惱と爲つて我を壓迫して來る。偶々積鬱の勃發することありとも、夫れが無意識的、非計畫的、無秩序のものであるならば、群衆心裡も一場の暴動を演ずるに止まり、有意義なるべかりし機運を無意義に逆轉せしむることさへある。理想は何人も描き得べし。只之に達するの道は天才と猛志に依てのみ拓かる。

歴史は轉換す。乍去、自ら轉換するのではない。時代を説明し、民衆を率ゆるの天才を得て、その猛志が時代を引き摺りて彼岸に送らざれば轉換の實は擧らない。實擧らざれば輿論は空論に等しかるべく、目的を達すれば、始めて偉大なる威力を認識し得るのである。輿論威力の透徹には是非共その統率者が必要だ。統率者の威力と聯合したる群衆の威力は輿論威力となり、この時に於てのみ『多數の威力は個人の威力に勝る』ことを得るが、統率者を缺いた輿論は如何に擴大せる輪廓を有すと雖、只一の天才に依て手もなく蹂躪さるゝとさへある。輿論の如く強きものはなく、輿論の如く弱きものはない。

吾國輿論威力の研究

此處に輿論と稱するものは主として政治其他社會問題に對する團體判斷を意味するもので、多くの場合は批評的態度に出づる。之を吾國史上に眺むれば、封建時代の封建的基

礎固き頃に於て何等研究の資料に値するものあるなく、封建時代の破壊的機運が動き來れる時、即ち幕末王朝憧憬の氣分が漲つて來た頃、始めて輿論の形態を認められるやうに爲つたのである。尙併しながら當時の輿論は各方面の智識階級に現はれたる先覺者の間に限られて、革命の直接運動を爲すの下準備に過ぎなかつたから、恰く民衆の共鳴を誘ふやうなものとは爲らなかつたのみか、壓制政府の辛辣なる迫害の網を避けつゝ暗中に飛躍する状態に在つたのである。隨て輿論的威力よりも少數識者の破壊的計畫から出た腕力的威力の存在を認むべきであらう。輿論的運動の過渡期には、腕力が之に加擔して、目的の遂行を助くるは東西軌を一にしてゐる。

『萬機公論に決すべし』の大詔煥發以後に勃興した自由の叫ひは維新革命の聲よりは、より多く輿論的と爲つて來た。民権を獲得せねばならぬ當時の國家は即ち專制の國であつたから、爲政者の警戒と迫害とは維新前の夫れにも譲らぬほど、辛辣暴虐なるものあ

りしと雖、而も『天才と猛志』の殺到する處、隨處に民衆を動かし、民衆を引き出すの熱辯が揮はるゝやうに爲つた。無意識的に或る物を要求しつゝあつた民衆の心琴には志士熱叫の聲が觸れて、不統一なりし民衆自身の思索は是等天才の啓發に依り漸く秩序的と爲つた。

志士の態度は既に死を期してゐる。その辯は決死雄辯である。が、時代の轉換は彼等少數先覺者のみの威力だけでは尙及ばぬことを知れるが故に、彼等は群衆心裡に響へて威力の量を加へんと焦慮る。志士の決死辯に感じたる民衆は、俱に死を誓つて起つ。威力いよゝ加はるに隨て迫害の壓力亦益々強くなるのであつたが、爆彈は其の抵抗に比例して破壊力を増す。死を期するまでの徹底せる威力主義は、迫害の度を加ふるに依て其の彈力は倍加した。爆彈は屢々破裂し、迫害者も被迫害者も共に負傷し、俱に慘死するの悲劇も演ぜられたが、威力漸く高調に達して『專制』の城は遂に崩れた。民権論者

の威力生活は身を以て保壘と爲し、命を以て彈藥と爲したのであるが、死するは聽て生くる所以、闇黒の生命を一轉して光明の生活に入らしむる眞の一路であつた。而して是れが日本に於ける輿論的威力の唯一にして最も光彩ある表現であつた。

最後に現代の輿論に就て一言せしめよ。眞劍の輿論威力を以て舊時代を破壊し、政治の社會に新生命を與へられて、立憲の大義は押し立てられ、國家の自覺による輿論政治が行はるゝやうになつたからには、國民は彼等の先輩に對しても輿論の眞價を認め、輿論の神聖を保ち、輿論の眞意義を發揮するに努むべき責任を感じざるを得ない。議會開設以後漸く國民は此の責任を自覺し、此の新運動を試むるに忠實であつた。今も尙忠實なるべく努力するものが決して尠しとせない。が、最近二三十年間の文明は、自由要求時代の主として政治的、思想的の開拓に努めたるに反し、餘りに物質的、機械的に傾き過ぎたため、輿論的威力の前に種々なる障礙が横はる様に爲つて來た。『雄辯の聲は黄

金の響に勝たず』懸河の雄辯と一封の阿賭物と、孰れが大勢の上に、より大なる權威を有するかと疑問と爲つて來た。輿論指導の立場に在る識者階級の人が試むる雄辯は時として一種の商品と爲り、利益の的に投ぜんが爲めの彈藥と化し、威力を發して的中れば即ち希望を達したと云ふに至る。この種の威力は無論徹底したる威力には非ずして、期待したる特殊の目的を達し得られるまでの示威的、虚勢的威力であるから、之に對する民衆の呼應も固より眞劍のものとは爲り得ない。彼に賛成し若くは反對するものも、ナポレオンの所謂『思慮なき群衆の騒ぎ』に過ぎない。輿論の眞なる威力を此の中より求めんは蛙の聲に詩韻を見出すよりも困難た。

智的判斷に基く輿論も、感情の助勢に依て其の威力を生ずるものであることは道理であるが、問題そのものの解決に對してよりも或る慾望を充たさんの感情が強きに過ぐれば、輿論の魂は消えて終ふ、現代の所謂輿論の中には魂の脱け殻が往々にして認められ

る。
 輿論は又必ずしも天才と猛志とに依らざるも、單純なる煽動に依て一勢力を形づくることもあり、またあり得べき道理である。この呼吸を呑み込んだる煽動政治家は、事ある毎に民衆を煽ることに全力を注ぎ、場當り狂言自在の術を施して輿論的威力を發揮する。煽動は、民衆の感情のみを射て豫定の目的を達せんと欲するものであるから、冷靜なる智的判斷を廻らすの餘地なからしむるを必要とし、論理の透徹に重きをおかず、慾望の満足と與ふべく、好餌を提げて之に憧憬せしむるの工夫なかるべからず。此の種の輿論喚起は割合に單純で、而も意外の効果を見得るもの、昨是今非や朝令暮改の不徳は問ふ處に非ず。當面の問題を當座限りに急轉せしむれば足る。群衆心理の瞬間的利用法を講ずれば可い。虞氏の所謂「吾人の希望する處は國民をして思考せしむるに在り」とは正反對に、國民に思考の餘裕を與へぬやうに、瞬間催眠術的に民衆の心を豫定の方面に急

轉せしむれば宜しいのである。此の方法は案外に簡易であつて、事實民衆は動き易いのであるから、敵も味方も頻りに煽動を試むる。双方共煽動の効果を相當に收め得る。昨日は甲の説に煽られて彼を是とし、今日は乙の説に煽られて甲を非とし、更に丙の説に依て彼にも賛成するの奇觀を呈し、凡ての主張に對つて喝采を與ふる。而して其の最も機敏にして巧辯なるものに捉はれ、是非の判斷を度外視して附和雷同するのであるから、一時的勢力は手もなく作られ、意外は意外を生んで局面轉換の有様が飄箏から駒の出でたる如き觀を呈する。政變など云ふ現象も存外手數のか、らぬ間に作られるのである。政治家は之を奇貨として、群衆心理利用術を様々の方法に依つて發明し、民衆も亦一種の茶番的感興を以て其の波に乗ることを拒まないといふ有様であるから、輿論の取引が宛然米相場の取引の如きものと爲つて仕舞ふ。煽るものも煽らるるもの、乗せるものも乗るもの、孰れも輿論の眞なる權威を放棄し、先輩の血を流して得たる立憲政治を愚弄

したものである。威力の眞價茲に至つて線香花火と擇ぶ處あるべからず、悲惨にして而して滑稽なる哉。

歐米立憲國の政治家は、その首領たるものが堂々と論陣を張りて、壇上に龍攘虎搏の壯觀を呈するが常であるに、日本の政黨に於ては、領袖が互に自己の政策を秘し、偽らざる赤裸々の主張を試むる如きは稀に見る處で、時に應じ問題に隨て説を二三にし得べき餘地を存して置く。惴惴にして横着なる是れより其だしきはあるまい。

輿論の威力は、その目的の鮮明にして、表現の徹底的なることを要する。主張は宜しく一貫せしむべく、言論は須らく斷定的ならしむべきである。融通の利く輿論は商品に等し。今後の指導者は此の點に於て、最も深き注意を拂はねばならぬ。

三 金 權 の 威 力

蓬萊山も目のあたり

人は黄金に依て試みらる。ナポレオンは民衆を豚の如く觀じ、黄金の餌を投ずれば或る程度まで人間を支配することは出来るものだと確信を作つた。彼の時代に於てのみ然るに非ず、現代に於ても、否、於ては殊にこの餌の効き目は強い。黄金に依て試むれば、政治家の主張も一朝にして抛棄せしむることを得べく、學者の節操も一夕にして崩解せしむることを得べく、時には國家そのもの、方向をすら轉換せしむることを得べき状態に在る。國家及國民に對しては、多く黄金の災厄を感じしむるものありと雖、之を須めて黄金の權威を揮ふものに於ては、黄金は政治以上、學問以上、而して道義以上の威力あるものとして、其の功を嘆美さる。

『黄金萬能』の名は黄金國なる米國から流行したるもの、彼の國人今や黄金萬能、黄金崇拜の名に對して耻辱の感を催すに至り、頻りに之を辯じて、萬能に非ず、崇拜せずと言ひ、黄金以外にも米國に人道あることを吹聴するに至つたが、理屈は理屈として暫く事實を撿せしめよ。

カーネギーの名は日本に於てカネホシーと訛つて唱へられてゐる。彼は黄金大王である。米國に於ける黄金大王にして、同時に世界に於ける黄金大王の名を恣にしゐるもの、其富何億ありやを檢せざれども、彼の名は今やロックフェラーと共に金權の代名詞と爲つて、米國の小學兒童に到るまで之を謳歌し之を羨望してゐるのみか、遠く東洋の孤島に於てすら少年の黄吻に謳はれてゐる。彼は金權の威力を揮ふに必ずしも金權的王者の豪奢を以てしない。一の威力は應用の途如何に依て様々の光彩を放ち得るもの、彼既に金に成功したる以上、續いて第二第三の満足を贏ち得ざれば承知が出来ぬ。彼は物質

的文明の開拓には凡らゆる貢獻を爲したるが、金權者なるが故に物質界の榮譽を恣にし得るは固より當然のことにして、差して自己の誇りとも感ぜざるべきは亦當然、轉じて精神界にまで侵略し、精神的開發に對しても立派なる着眼あり、堅固なる操守ある由を宣明して喃喃れ學界の殊勳者とも爲らんことを志した。彼は先づ世界屈指の學術研究所を起すに努力し、之を成立せしめ、數多の學者を包容して文明の一美觀を呈せしむるに至つたのみか、更に全米國に三百近くの圖書館を建設し若くは建設の助力を與へて、自ら學界の一權威たる立場を作つた。其他美術にも慈善にも夫れ相當の着眼あり貢獻あつて、カーネギーの名は社會の凡らゆる方面に彼自身の權威と共により大なるものと爲つた。是等の凡ての文明的施設が悉く彼自身の發意であり理想であるとすれば、彼は實に現代に於ける大偉人たるに相違なけれども、若し彼より彼の背後にある黄金を控除し、赤裸々のカーネギーとして其の個性を檢するならば、果して如何ほどの人材なるか、如

何ほどの威力者なるか、人物研究の標準は全然新たなものと爲るに違ひない。詮する處彼の精神界に及ぼしたる功績も彼自身の誇りに非ずして、彼に賦與されたる金権威力の光榮である。

金権の威力は物質界の問題のみに非ずして、精神界にまで其の餘光を發揮し得るものとの信念は、彼に依て世界の金権者流に與へられ、各方面の金権者は種々なる形式を以て其の光彩を放つ舞臺を擴張するに至つたのである。而して高價なる人格を買ふの術を覺えたから、大なる金権者は必ず大なる人格として謳歌さるゝやうに爲つて來た。株式相場にて一攫巨萬の富を爲したものは、數十百萬金を學界に投じて一角の傑物と爲る。『美學』に依て得たる名は前日の奇利に依て富者の名を得たるものよりは一層の光彩あるが當然、之に依りて彼等の位地は更に向上し、之に依りて彼等の『信用』は高まり、之に依りて彼等の事業は擴張され、一抛したる『美學』の金は却て彼等の富を加上するの金と

爲つて還元し來る。大なる富は何處に消費しても其の根を涵ふの水と爲つて流れる。金権の威力も亦盛なる哉。

金権の王者にも様々あり。鐵道王、鑛山王、造船王等、其他中王小王の割據せる状態は宛然封建時代に於ける諸侯の如き觀を爲してゐる。個人としての金権王者は獨り米國に限らず、列國の金権者皆同様の威力を有し、其の國家を有せざる猶太人さへも歐洲の大國の財政を動かすほどの大威力を有してゐるが、國家としての金権威力者も亦個人同様に發展して、世界の運命を支配するの觀がある。千九百十二年に於ける米國の富力は實に千八百七十七億弗、一人當千九百六十五弗、紐育一洲の富力のみにても二百五十億弗を算ふると云ふの大威力を包藏してゐる。パナマの一工事だけに投じた金が二億弗、更に大陸横斷鐵道やマタン半島の大建築やテキサス大平原の農産や何れも驚嘆に値する富の威力を示してゐる。一石鹼會社が一雜誌に仕拂ひたる廣告料十五萬弗など云ふ廣

告費もあり。牛乳を沸かした風呂に垢を落す紳士もあり。金の屏、瑪瑙の橋、珠數く庭の蓬萊山も目のあたり眺め得らるゝ景色、美觀壯觀言語を絶してゐる。

金は人格を製造す

實に黄金は萬能だ。豈獨り地獄の沙汰のみならんや。活きた現世の凡らゆる沙汰も金次第で埒の明かぬものとは殆ど無い。金は山を作り河を作り人格をも作る手品の種である。金に依て偉人と爲り得たるものはカーネギーのみでない。米國のみでない。偉人やら功勞者やら篤志家やら、財布の中から駒の如く飛び出す。米國人は殊によく此の事實を知り、殊に敏くこの威力に感ずる國民で、彼等の所謂奮闘生活の目的も多くはカーネギーを憧憬し若くは小カーネギーとして夫れ相當の威力を發揮せんことを要望するにあるのである。彼等は彼等の郷里に大理石の大建築を一日も早く設けて之に居を構へた

い。ボーイの祝儀に金貨の大きい奴を掴ませたい。美人を携へて歐羅巴を漫遊して來たい。數萬の勞働者を使役する工場主と爲りたい。私費で建てた大學校の名譽校長と爲りたい。慈善事業に水をかける如く寄附がしたい。是等が彼等の理想であり、方針である。勉強も之に依りて勵まされ、冒險も之に依りて斷行される。夢は毎夜黄金の夢、競馬を見ても拳闘を見ても只では詰らない。ドルを賭けて一攫千金萬金の瞬間成金と爲り得ば、人生這んな僥倖はあるまい。同じ理屈のある裁判沙汰なら金ある方に危険は少く、貧者の立場は常に割が悪い。罪を贖ふも金次第、雷名を博するも金次第、儲かるだけの儲けをしてから人生の總勘定をするが得策と、此處に彼等が奮闘努力の意義も生じて來る。

金權威力と社會主義

金権威力の發揮は日本に於ても近年頗に盛となつた。金権の王者岩崎の一揮一笑は、時に國家の政機を擒縱することあるべく、三井の一舉手一投足は、時に對外貿易を閉閉することを得べく、臺灣の砂糖は以て國士の買占を試むるに足るべく、白粉と石鹼は名流貴婦人を廣告の道具に使用するに足るべく、藥舗と料理師は醫學博士を驅つて自家の番頭に供するを得べく、相場成金は萬金を慈善に投ずるに依り、一躍して立志傳中の人と爲り得べく、社會は是等の事實に對して殊に敏感であり、狂熱的であるから、金権の一波動が及ぼす社會的反響は益々過激のものとなつて來る。青年崇拜の標的も漸次金権的に傾いて來る。ナポレオンよりはカーネギー、ルーテルよりはセシルローズである。論語よりは算盤の權威により多く打たれる。金権の憧憬必ずしも可ならず。又必ずしも不可ならず。金権は物質の支配者である。人間生活の一面は物質である。乍去、物質の權力には自ら限界があるものであつて、世界の物質を一人にして之を包

容することは困難である。常に金権者を呪ひつゝある社會主義の口吻を借りて言ふならば、金権者連も其の有する處の富を完全に保持するの途は得難くして、之を擁護し之を増大せしめんが爲めには、貧者よりもより多くの苦勞をして居るものである。一步物質の戰場に敗るれば、彼等は直ちに下の階級に墜落すべく、一段の階級を下るとの耻辱と苦痛は、貧者が其の有する全部を喪ふの苦痛よりも甚だしきものである。富者は富者の程度に於て、夫れ相當物質上の不安を感じてゐる。シンジケートやトラストなども一種の不安から出る新計畫で、彼等は勞働者の反撃を怖るゝとコレラやペストの如きものがある。勞働者を怖るゝと同時に、彼等は又同業者の、より大なる計畫を怖れ、その競争を警戒する。實の山を領した彼等は、その山の崩れざらんとを憂ふるに存外頭を痛めて居る。金権の威力も所詮徹底したる威力ではない。

同時に、金権を威咀し金権を輕侮しつゝある社會主義そのものに對しても、我等は其

の不徹底を憫むのである。仔細は社會主義が物質萬能の金權者を嗤ひながら、自ら物質に偏執し、物質それ自身の解決を以て人間生活を解決し得べきが如く沙汰するに依て、同じ『不徹底』に墮してゐるものなるを思ふ。社會主義にも様々あるとは承知してゐるが、所謂純正社會主義と稱するものを以て、彼等の中の最も徹底せる主張なりと假定せしめよ。純正社會主義は唯物論の上に立つて居る。祖述者たるカールマルクスの所謂歴史哲學の如きも、その魂は唯物論である。經濟進化の理法は固よりのと、人間本來の面目も凡て唯物的に観するの學問である。物質の外に人生なく國家なく世界なく、而して倫理もなく、人間生活の全部が唯それ物質のみである。この流れを汲んだ社會主義者は勿論根本の觀念に於て、マルクスの如くあり、物質的である。

試みに彼等が理想とする處の百年後若くは數百年後に於ける社會の形態を、其の小説的叙景に依て見るに、人間は凡らゆる人爲の階級を離脱し、富の分配は絶對的均一にし

て、所謂各人の必要に應ずる配當に依り、一人の不平を懷き得るものなかるべき方法に出で、一人の怠惰なく、一人の過勞なく、各個人の一日の勞働時間が二三時間を出でざるも、優に豊富なる生活を營み得るだけの報酬否生活の保證あり、働かざる者は一人もなき筈なるが、病者弱者にして之を能くせざる者に對しては社會が之を保護するの義務があつて、働く者と毫も懸隔なき待遇を與ふべしと云ふ。而して所謂必要額以上の物質的要求を爲す者は有り得べからずして、物質上の何等競争なく、衝突なく、絶對的平和の社會を實現し、世は義農の代、國は唐虞の國、而して又對抗的國境なるものあるなくして、世界は擧げて圓滿なる一家庭の如くあるべしと、地上の天國を描くと精彩を極めてゐる。

按ずるに社會主義の理想する處は、彼等の想像の及ぶ限りに於て、物質上の大調和を描き出したるものであるから、説の如き目標に向つて適當なる進路を發見し、豫期した

る如く茲に到達するを得ば、誰か個様の大平和を拒否するものあらん。人類を擧げて其の説を謳歌し、其の社會を憧憬するに相違はあるまいけれども、扱、人間の本體は、相憎左様に單純なるものにてはあらずして、只一人の我儘を制するに千萬人の手を借るも、尙及ばぬ底のものであるから、皆が皆、打ち揃つて平和の旅路に向ひ、足並崩るゝともなく、謀叛を起すともなく、個人主義の威力を發揮するものもなく、他人を妨げ他國を呪ふものもなく、恬淡無爲に社會主義者の指導するまゝ、之に追隨し謳歌して行くものとも思はれない。而も一人の反逆者あれば大勢逆轉の危機を作る易々たるものあるに於て、彼等が凡て神様に非ざる限り、之を御して行くとは六ヶしい。人間個性の慾望並に之より發する勢力は殆ど際限なく擴大されんとするの傾向あるものなれば、理屈を以て彼に誨へ、彼を導かんとしても、一念拒否する精神は如何とも爲し難く、若し非常手段に依る處の解決法即ち所謂社會主義的戰鬥、詳しく言へば階級闘争の勝利に依りて

壓制者即ち社會上の強者を征服して其の目的を達せんとする運動を以て、強行的に進まんとなれば、世界を擧げて一大闘争の渦中に陥穽せしめざるべからざるのみか、假りに或る目的を達して、所謂平民階級の勝利に歸するとあるも、其の時は社會に公約したる物質的慾望の満足を得たるに止まり、個性に潜在する際限なき慾念の發動が、之によりて停止さるゝものとは思はれず、物質の拘束より解放されたるのみにては満足し得るものに非ずして、解放の後に於ける自我發展、即ち人間本然の我儘が更に強く増長し來る時、何者の力を以て之を制止せんとはする。

彼等之を見越して、豫じめ人心の統一法を説いて曰く、社會的自覺を促がし、眞に人類共存の理想を認め、社會的權利義務の關係を徹底的に理解せしむるならば、誰か強ひて其の理想に背き、彼等自ら組織する處の社會を危うくせんと試むるの愚を爲すべきぞと。一應是に道理である。眞に自覺し、眞に理想せる上、人間が強ひて脱線する必要な

きは、如何にも爾かあるべき筈であるが、もとく社會的自覺なるものを喚び起すものは、理屈である。單なる理屈である。之を誨ふる者も理屈で誨へ、之を覺るものも理屈で覺る。而して理屈の解釋は常識である。知らずや理屈は何時でも變じ得るもの、常識は常に進歩するものなるを。

常識が進歩し、理屈が變動して、理屈の上に立つた自覺を再び理屈で破壊し新しき理屈を以て新しき自覺を起し、猛志を揮つて舊き理屈を一蹴し去ることあらば、社會の形態は何時にても轉換せしむるを得べく、人心の方向は何處へでも差し向けることを得るのである。社會主義が究竟の眞理に非ず、徹底せる理論に非ずと言ふものは是れである。

彼が如き巧妙を極めた理屈が何故なれば爾く根抵の脆弱なるものであるかと云ふに、彼は人間本來の面目を物質的にのみ認識し、物質的にのみ處分せんと發起した最初の見地が未究竟のものであつたからである。餘りに人間を單調に見たからである。

人間は肉に生きて居る。乍去、人間は肉にのみ生きてゐない。人間の個性を支配するに、肉の經驗及其の智識と理屈とを以てせんとするも、肉以外若くは肉以上の或るものが縦横無盡に活躍し來る時、如何に之を處置せんとはする。肉の社會には限界があるけれども、肉以外の社會には限界がない。其の活動する舞臺も無限の境に擴がつてゐる。社會の限りある智識を以て、限りなき活動を支配し拘束せんとするは聊か受取れない。註文が少々無理ではないか。

四 科學の威力

精神界を感歴し去りぬ

茲に科學と云ふは主として物質界の科學を意味する。十九世紀の後半より二十世紀に

亘つて、歴史の異彩は言ふまでもなく科學の進歩、物質的文明である。個人と個人、社會と社會、國家と國家との對抗は年を追うて競争の勢を助長し、相打つて物質の開拓を促進せしむるに至り、發見、發明、改良、進歩は人智の花と爲つて爛熳たるものあり。新しきものは舊きものを征服し、大なるものは小なるものを威壓して、物質界に於ける一種の威力主義が發揮されるやうに爲つた。

日本に於ては其の文明が幼稚なりし爲め、歐米との對抗上特に其の缺陷を補ふの急務を感じ、明治以來この方面に對する努力は目覺ましきあつて、文明の本場たる歐米人をして、却て其の異常ある發展に驚愕し、畏怖せしむるに至つたほどである。毎年五十萬人以上も増加する人口率に對して、物質文明の力に籍り、生活の維持發展を計るの必要は痛切に感ずる處であつたから、此の努力は決して無意味のものではない。否、是れあるに依て日本の國家的彈力を増大し、對外的威力をも充實するを得たのである。

日本の威力を増大したるものは科學であるか。然らば科學は尊重すべく、崇敬すべきものに違ひあるべからず。之を尊重し崇敬して、國家的威力をより大なるものと爲すべく、より以上の研究努力を試みねばならぬ。それも當然だ。乍去、科學は人間生活を解決する唯一の手段でもない、又最大なる權威でもないのであるから、是れにのみ没頭し是れにのみ心酔して、人間を機械の如く若くは貨物の如く輕視するやうでは寧ろ危險千萬である。日本の科學勃興以來は、物質文明の威力を以て精神文明を破壊し若くは壓伏し去つたかの觀がある。勿論精神文明の根柢は何物の力を以てしても毀くる能はぬ本然の性を有つてゐるものであるから、破壊されたりとて無に歸する譯ではないが、尠くも對抗上精神界を征服したる如き状態と爲つて、物質文明の大波が精神文明を洗ひ去つたのである。我等は這の現象を批判するよりも先づ其の威力を認識して、威力主義の研究に資する處なかるべからずである。

世界を恐怖せしむる獨逸の科學

科學の威力を最も高調に發揮したるものは、何と云うても獨逸である。彼は不斷の努力に依て科學の最大權威者と爲り、世界の科學界が、彼を以て中心地とするまでに向上せしむるを得た。殊に夫れが大戦の勃發に依てより多く眞價を發揮し來り、聯合國側は彼を敵國としながらも、敵の中に現はれたる科學の威力に對しては甚だしく驚嘆し畏服した。獨逸の科學が進歩してゐるとは承知してゐたが、あれほどまでに徹底した威力を有するものとは氣付かぬのであつた。

獨逸は英國と開戦してから、英國の豚脂を中立國經由の方法で盛に輸入した。英國は其の何國に行きて何用に供せらるゝものであるかを知らず、只利益の前には賣れる限り賣るより外に考は無かつた。多量の豚脂を賣つた。獨逸は窃かに輸入して、多量の豚脂

を買つた。奚んぞ圖らん、獨逸の科學は豚脂よりグリセリンを採取するの術を發明してあり、それがナイトログリセリンの重要な原料と爲ることを知つてゐる。ナイトログリセリンは澤山製造された。ナイトログリセリンは爆發藥である。倫敦タイムスが後に此の事實を探知して痛論する處ありしも、其の時までには英國の豚脂が敵國の爆彈と爲つて、飛行船上から倫敦の市街へ投下せらるゝの魔物と化して居たのである。

同様の奇觀は日本に於ても發見された。是れも當時聞き傳へて何人も驚嘆したる處であつたが、戰亂勃發の當初までは、日本の鑛山から掘り出した水鉛が盛に獨逸へ輸出された。獨商之を買占むるに全力を注ぎ、日本に於ける同鑛脈の有らん限を掘り盡さずれば已まぬ意氣込で、營々致々水鉛の採掘に努力したが、日本人は其の何の用途に供せらるゝを知らなかつたから、別して價格も引き騰げず、一貫目百圓内外で賣り飛ばし、大いに奇利を博したる如き感を以て悦んだ。確かに奇利ではあつた。乍去、國家の大局か

らすれば、其の事直ちに日本國の危険を増大するの無意識的動作であつたのである。水鉛は大砲の威力を加ふる最上の鍊鐵原料であつた。曾てクルツプ會社は日本の名刀「正宗」の眞價を認め、其の鍛冶法には何等かの秘訣あるべきを豫想し、正宗銘刀を買占めて、之を分拆研究すると多年、中に水鉛の原料あることを發見し、砲身の鐵材に之を應用すれば、堅牢無比の武器を得らるゝに相違ないと合點したから、日本人の氣付かぬ間に水鉛を輸入するの策を講じたものであることは、遲延ながら後で探知し、水鉛は一躍して一貫目一萬圓、即ち百倍の暴騰を來すに至つた。科學の威力は古今無比の銘刀より其の獨專的權威を奪取した。而して一貿易品の價値を、咄嗟の間に百倍ならしめた。科學は水鉛の値を發見し、之に依りて鍛鍊されたる四十八珊巨砲は更に科學的威力を著しく發揮した。一彈飛んで其の距離十四哩に達し、破壊の威力は大地を穿つと三間以上、方十餘間に及び、一町以内の人馬を無感覺ならしむる。彼のモーブージュにて發

射せる巨彈の如きは、只一發で二千五百人を斃したと云ふの猛威、殺人器も茲に至つて偉なりと謂ふべし。一門の價五十萬圓、彈丸一發五千五百圓なりと云ふも、而も科學の威力なかりせば、彼が如き猛威を其の結果に見ることは出来ない。

敵國を侵略するの途を虚空に作れる飛行機も亦驚嘆に値するものあり。英佛海峡を一夜の間に二回往復すべしと云ひ、砲彈を避けんが爲めには空中七哩の高處を航行すべしと云ひ、能く事實に立證してゐる。日本の如き幼稚なる飛行機にても、尙且、東京より九州まで二晝夜を要するに過ぎぬまで發達してゐる。

巴里エツフェル塔上に設けたる無線電信は、獨逸を通過して遙かに露國のウルソーと通信してゐる。英國オックスフォードの最高地に設置したる無線電信は、日中は埃及と通信し、夜間は遠く印度と通信し得べしと云ふ。其の距離一千哩を越えてゐる。

星の世界に動物の生活状態を認むるの科學は、星と地球との社交を開始するの科學と

爲らぬとも限らぬ。

猿の骨を以て人間の挫骨を接ぐの科學は、龜の命を借りて人間の命を延長するの科學と爲らぬとも限らぬ。

組織培養法に依りて、動物の筋肉を其體軀より離して培養し得るの科學は、懶死者の胴と首を別々に生存せしむるの科學と爲らぬとも限らぬ。

五 信念の威力

英雄の弱き半面

英雄の威力が如何に其の猛志と共に發揮されたりとて、彼の有する威力の根柢に金剛不壞、千古不磷の一大信念なき限り、所詮は人間の力が異常の形に發展したるまでの話

に過ぎぬ。他の凡人に對しては非凡であるけれども、這は單なる比較上の力であつて、絶對の力ではない。より以上の威力に逢へば直ちに挫折するの力、或は谷まつて自ら滅却するの力である。世界隨一の英雄ナポレオンの力も彼自身の沈淪と共に雲散霧消して仕舞つた。彼が威力生活の自由を奪取された後の言動は、英雄の末路に其の悲哀を表現すること極めて露骨なものであつた。前日の大威力に似ず、如何に夫れが非威力的であつたか。そして前日の快活に似ず、如何に夫れが憂鬱であつたか。懊惱、苦悶、痛惜、後悔、而して怨恨、憤恚、凡らゆる人間的弱味をも曝露して、所謂強者の半面に潜在した弱者的性情の總勘定をしたのであるまいか。彼は正直なる人間であつた。

千古の英雄ナポレオンにして、其の人間的個性を呈露せば斯の如しであるからには、他の一般の英雄が有する處の威力の正體は問はずもがなである。

何故なれば彼は個様に強くして而も弱かつたか。彼は只の人間で無かつた筈であるけ

れども、矢張り人間以上には出られなかつたからだ。有り合せの人間を、其の儘擴大して、他の人間よりは偉大な人間と爲り得たるまでのこと、彼自身の根本的、絶對的擴大を爲すべく、人格の改造を試むるの大術を知らなかつた。人間のまゝの發展では、彼の威力に限界を定めぬ譯には行かぬ。根本的改造を爲された曉には、人間以上の絶對的威力に觸れ、之を體現し來つて、無限の威力を發揮し得るから、何處まで發揮しても、谷まる處を知らず、消ゆる憂もなく、冷える心配もないのであるが、彼は此處には達しなかつた。『豈我を惱ますアルプスあらんや』の氣概はあつたけれども、『我』を惱ます『我自身』に勝ち、之れを支配することを知らなかつた。

彼が如き大きな器に、人間以上の大威力を盛るとが出来たら、夫れこそ鬼に金棒で、如何底の大事を爲し遂げたか、見ものであつたらうが、是れなかりし爲め、彼の活躍した経過は、單なる颶風の跡に過ぎなかつた。人間としての威力は既に極點に達し、史上

のレコードを破るの大芝居をやつて退けたので、一應何人も彼に推服するの念は禁じ得ない處であるが、凡にして弱なる我等の見地からしても、尙彼の全部に敬意を拂ひ難きのみか、明かに彼を輕侮し得るの餘地を發見すると云ふのも、この爲めだ。

ソクラテスとルーター

ソクラテスは一種の信念を持つてゐた。彼は從來の哲學に不満を唱へ、從來の人が神に對するの態度を非議して、彼自身先づ人間の靈魂を研究し、人間の研究を通じて神を研究し、之を禮するの道を發見した。彼は既に人間の有り合した力以上の大なる力に達してゐた。それ故に彼は超人間的威力を發揮することも出来たのである。

彼は從來の信仰を破壊する者であるとの理由の下に牢獄に繋がれた。彼の弟子是れを救ひ出さんが爲め、獄吏に賄賂を喰はする術を知り、之をソクラテスに謀つた。その時

の挨拶が彼の本領を遺憾なく發揮し、且、信念の威力をも充分に漲らしたものであつた。曰く

『正しきことより外に貴ぶべきものは無い、牢獄の不便は寧ろ予に於ては笛と鼓を聴くが如き快感を得る、其の妙音は予をして汝の言ふ處を聴くに聳ならしむるのである』

彼は個様にして毒杯を手にすることを甘受した。彼は信念の上に生きてゐる。今日も尚生きてゐる。

ルーテルは一寒僧の身を以てして、獨裁主義の法王を向ふへ廻はし、火を吐くやうな雄辯を揮つて之と戦つた。信仰の獨立、自由、而して其の權威の前には何物の力も聊か障礙とは爲らなかつた。法王の破門狀を鼻紙の如く引き裂いた。王の軍隊を蟻の如く蔑視した。そして絶對的威力を發揮することが出來た。信念の威力は存分に發揮されて、

宗門が儀式の末に拘泥する陋習は一掃され、教壇の權威は立派に確保され、そして今日まで徹底してゐる。

火も焼くど能はず

信念の威力に勝ち得る何物の權力も存在せぬと云ふの事實は、各種の事例を擧げ曾て拙著『大日本雄辯史』に列記しておいたが、中に就て最も顯著なる一奇蹟的威力發揮の事實は、彼の足利義教將軍の凡らゆる迫害を甘受した久遠成院日親の法難史である。這は單に佛敎史上の偉觀たるに止まらずして、日本の思想史上見逃がすべからざる大問題で、學者も政治家も、乃至宗教家も教育家も一様に深き注意を拂ひつゝある處、其の事蹟は亦信念威力の研究上無比の好資料たるが故に、此の意味に於て更に略説して見たいと思ふ。

久遠成院日親は、信念の權化たる本化日蓮大士を教祖とする日蓮主義者中の代表的人傑にして、其の信念より出でたる金剛力の強度に於ては世界の史上に其の例を求め難き處、而も之に對する迫害者側の迫害振が同じく古今を絶したる嚴酷奇烈のものであつたから、信念の彈力も其の抵抗の力に比例して、極度に發露されたのである。武門政治時代に於ける刑罰法は、草莽時代の蠻力統治を専らにせし時代と殆ど撰ぶ處なきまで酷虐を逞うしたるものであつたが、中にも足利將軍の行ひたる當時の刑罰は、聽くものをして耳を掩はしめずんば已まぬ底の極端なものであつた。

日親は世祖の活教訓に基いて、多數の低級なる民衆を信伏せしむるよりは、上一人の大權力者即ち當時の征夷大將軍を擒にするのが先づ必要と認め、將軍足利氏折伏の手筈は定まつた。取り敢えず國諫狀を將軍に呈し、『汝の信ずる邪義を一抛して唯一無上道の本信に歸せよ、否らずんば無間地獄に墮さるるを免れ難し』と云ふにあつた。將軍

が只の無心俗學の徒であつても尙且、聞き捨て難き此無遠慮な諫狀、而も將軍は台密の高僧となつて、曾ては天台の座主をも勤めたと云ふの智者であつたから堪らない。愼志の炎は將軍の胸を焼いた。さるほどに日親は『立正治國論』を述作して、再び國諫を試み、如何なる忠告、勸言をも耳に入れず、將軍論折の舌鋒いよ／＼高調に達して來たので、同じく折伏の利劍に瘡けられた他宗の法敵は一齊に起つて將軍を煽動し、日親刑罰の嚴重ならんことを希望し勸説した。

將軍は其の最上權威を示すべく日親逮捕を命じ、極悪人のため作られた牢獄に投じ、前代未聞の大拷問を試みた。夏は日中の炎天に火を以て日親を責め、半焼けになるまで之を焙り、冬は夜の嚴寒に氷の水を浴びせ、其他大悪人に適用する一ト通りの責め付けは全部試みられ、『如何に其の所信を捨てざるか』の變節強請ありしも、一拷問を経る毎に日親の反撃いよ／＼激しく爲り、水火の責めも何等効力を奏せざるものゝ如くあつた。

ので、遂に最後の極刑として、赤熱の鍋を其の圓顛に冠せ、尙肯かざるかを問へば、『小細工の活地獄何の苦患あるべしや』とばかり、平然自若として火の中より折伏の熱舌を揮ひ居るより、不思議も不思議、恐ろしくもあり、獄卒等を初め將軍までも、我より刑罰の中止を希望するに至り、一切の迫害は全然意味なきものと爲つた。乍去、このまゝ捨ておくは將軍の權威全潰れと爲ること故、せめて今後の法論を自由ならしめざるやうにとて、舌の根を少し缺むべきことを命じたが、信念の威力に打たれた獄吏等は再び日親の前に近寄ることを拒否する。遂に日親は自ら進んで『法難の記念』に舌だけは切らせた。其後將軍義教は日親の豫言した百日目の現罰に逢ひ、赤松氏の弑する處となり、幕府は此の上の災厄を顧慮して、彼を牢獄より放免せんとしたるも、『將軍正法を諷りて遂に現罰を被れるを知り、我獄を出づるに忍びず』とて出獄を承知しなかつたが、後、將軍の身代りとして近臣を其の弟子に供したるより日親漸く獄を出で、更に前日に倍したる

大法戦を開始すると、爲つた。

信念の大威力の前には火も熱を失ひ水も冷氣を去る。専制政治の主権者が迫害の限りを竭くしても何等の痛痒を感じぬ。この一事教界の大問題ならずして、教界に何の問題ありや。

英國の僧正パーカーは皇帝を痛罵して『帝は日曜日に教會に行かずして劇場に行く、是れ基督教の罪人ではないか、予は皇帝の忠臣たらんと欲するも、而も基督に不忠なるとは出来ぬ』と云つた。日親は時の主権者に向つて『汝無間地獄に墮つ』と罵る。信念威力の前には、俗世間の一切の威力はゼロである。

曾て日親の信念に感じ、驚異の眼を睜つて其の史傳を研究したりし樗牛博士は左の如き言を貽してゐる。

『この上人の事蹟は、時の政府より大迫害を受けたる點に於て本邦宗教史上に一異彩

を放てり、又他方より見れば、凡て一個人の信念の力が如何なる點まで外來の勢力に反抗し、折伏し、且つ是に打勝ち得るものなるか、又一念の信力が靈性に安慰を與へたるの結果として、如何に肉體の苦惱を忍受し、且つこの苦惱によりて受けたる傷害を無効ならしめ得るものあるかの絶好の事例として見るを得む：…あゝ日親の如きは眇たる一沙門に過ぎざれども、其の信念の力によりて國家を折伏し、個人の勢力が時としては地上の如何なる權力にも匹敵して其の威嚴と榮光とを保ち得るものなることを現示せる人道上の一大事實として見るを得べし、殊に人間の力として殆ど堪え忍び得べくも覺えざる酷烈なる傷害も、一念の信力によりて優に是を忍受し、是れに打勝ち、獨り精神の獨立のみならず、肉體の健全をも保全し得たるは、實に目ざましき事例と謂はざるを得ず、世人往々曰く『人は氣で生きる』と、日親の如きは眞に是の套語を事實の上に現はしたるものと謂ふべし』

樗牛は實に敏感な人であつた。この人にして威力の最大なるものを感じたのだから、我等の鈍感を以て感じた日親とは又別であつたらう。

完器は水を漏さず

古今を絶したる英雄の典型ナポレオン、大皇帝の無上大權を有したりしナポレオン、彼が如き人傑が却て其の臨終に、人間の最大弱點を曝露し、監守の一兵卒に囁はれるやうな醜體を現すに反し、眇たる一寒僧、身に寸鐵を帯びずして、地上の最大權力を翻弄し去れる日親の如きもあり。信念の有無と權威の強弱とに斯くまで甚だしき交渉がある

と云ふに就ては、一言補足しておかねばならぬことがある。力の持主は人間である。その人間が他の力に對する時、その器が完全なるものと爲つて居らねば、器の缺陷に乗じて他の力が侵害して來ることは知れたことだ。『匠その工を

克くせんと欲せば先づ其の器を利にすべし』とは是れである。

信念の権化、日蓮大士の如きは、その弟子からお土産を貰つた時のお禮にも左の如き大教訓を施された。『器』の辨としては蓋し這の禮狀が古今獨歩の大判であらう。僅かのお土産が萬年の貴寶を以つて返禮された一條（秋元御書）を摘録すれば個様のものである。

『筒御器一具付三十並に盞付六十送り給候畢ぬ、御器と申すは、うつはものと讀み候大地くぼければ水たもる、青天淨ければ月澄めり、月出でぬれば水淨し、雨降れば草木昌えたり、器は大地のくぼきが如し、水たまるは池に水の入るが如し、月の影を浮ぶるは法華經の我等が身に入らせ給ふが如し。器に四の失あり、一には覆と申して、うつぶける也、又くつがへす、又は蓋をおほふ也、二には漏と申して水もる也、三には汗と申してけがれたる也。水淨けれども糞の入りたる器の水をば用ゐる事なし、四

には雜也、飯に糞、或は石或は沙或は土などを雜えぬれば、人食ふ事なし、器は我等が身心を表す、我等が心は器の如し、口も器、耳も器なり、法華經と申すは佛法の智慧の法水を我等が心に入れぬれば或は打ち返し、或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ、或は唱へじと吐き出しぬ、譬へば器を覆するが如し、我は少し信する様なれども、又惡縁に値うて信心薄くなり、或は打捨て、或は信する日はあれども、捨る月もあり、是は水の漏るが如し、或は法華經を行する人の一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿彌陀佛など申すは、飯に糞を雜へ、沙石を入れたるが如し、法華經の文に、但樂受持大乘經典乃至不受餘經一偈等と説くは是れ也、世間の學匠は法華經に餘行を雜へても苦しからずと思へり、日蓮もさこそ思ひ候へども、經文は爾らず、譬へば後の大王の種子を妊めるが、又民とつけば王種と民種と雜りて、天の加護と氏神の守護とに捨てられて、其國破る縁と爲る、父二人出來れば王にもあらず、民にも

あらず、人非人也、法華經の大事と申すは是也、種熟脱の法門法華經の肝心也、三世十方の佛は必妙法蓮華經の五字を種として佛に成り給へり、南無阿彌陀佛は佛種にあらず、眞言五戒等も種あらず、能々此の事を習ひ給ふべし、是は雜也、此の覆、漏、汗、雜の四の失を離れて候器をば完器と申して、まつたき器也、壺つゝみ漏されば水失する事なし、信心の心全ければ平等大慧の智水乾く事なし、今此の筒の御器は固く厚く候上、漆淨く候へば、法華經の御信力の堅固なる事を顯はし給ふ歟」

實に覆へるともなく、漏ることもなく、汚れることもなく、雜することもなくして、器の失を離れ、完き器に淨き水を入れ、固く保たれた場合でなければ、信心は完全なるものと言ふことを得ぬ。信念が『筒の御器』の如く固く、厚く、淨ければ、何物の力も之を傷つゝることが出来ぬ。

皇帝を叱責したパーカー僧正の如きは、器の完きものであつた。法王を彈劾して教權

の獨立を得たるルーテルの如きも完器、乃至毒盃を甘受して節を完うしたるソクラテスの如き、火の中で大論説を試みた日親の如き、若くは秀吉の命を峻拒した日奥の如き、胸に七本の箭を立てられても鎌倉幕府の命に従はなかつた熱原神四郎の如き、何れも完器中の完器である。漏ることなければ、汚れることも無かつた。而して是等の完器に對しては人間の凡らゆる權力を加ふるも、何等の痛痒なきのみか、却つて其の堅を増し、光を加ふるのみである。

二 威力生活

一、ニイチエ論

彼は如何なる人物なりや

風雲的に威力生活を爲したるものは、奈翁を初めとして多くは腕力を本位とするが、純なる威力生活は、主として信念の上に立つて居る。尠くも哲學的生命を有つて居ると云ふことを得る。

ニイチエは殊に哲學的解釋を下して、最も徹底的なる、而して露骨なる威力生活を主張した。彼は人間の絶對的解放を要求し、偽文明の拘束から離脱し、眞文明の自覺を促がすと云ふの意義を以て從來の道德と慣習とに反抗した。彼の一本調子の猪突主義は如何なる場合に何物に對しても、苟も妥協的態度を容さない。彼は哲學者であると同時に詩人であつた。熱情の迸る處、全く常識の批評から蟬脱して居た。隨て時の人並に後人の彼を見ること區々萬差で、或は大哲人と謂ひ、或は大詩人と感じ、又は我慾一天張と謂ひ、極悪人と稱へ、今日に至つても未だ彼の正體が誤りなく理解されたと云ひ難いのである。否、寧ろ不可解のまゝ葬り去つて、この上の研究を試みようともせぬ人が多い。我等も無論ニイチエ研究のため特別の努力を試むるほどの熱心家でもなし、又左ほどの必要も感ぜぬ處から、從來眞面目に研究し來れる人々の比較的同情ある説を標準とし、成るべく善意を以て彼の言行を解釋し、其の威力生活の研究に資すべき要領のみを捉ふることに盡力したのである。

彼の人と爲りを略説するならば、一八四四年サキソニアに牧師の子として生れ、母一人の手で育てられ、ボーン大學及ライプチヒ大學に學び、シヨツペンハウエルの哲學を深く研究し、ワグネルにも親しんだ。後バーゼル大學の教授に擧げられたこともあるが間もなく普佛戦争が起つて、彼は之に従軍することゝ爲つた。從軍中病魔に冒され、中途歸任して著作を開始した。ワグネルとの親交は後破れ、又失戀の苦味をも経験した。それより彼は漸次個人主義の學風を興しつゝあつたが、健康は反對に衰弱の方に傾き、敏感なる彼の神経は益々鋭く爲つて來た。療養のためには屢々旅行し、少しく快ければ著作に耽る。鋭敏の神経は漸次過敏に進み、遂に精神状態が錯亂するやうに爲つて來る言論筆致亦次第に亂調と爲る。而も過敏に爲つてから書いたものゝ中、其の超人觀の如きは稀有の大作で、世界の思想界を驚異せしむるものと爲つた。一八八九年以後の精神状態は全く脱線して仕舞ひ、一九〇〇年遂に肺炎に冒され、五十六歳で斃れた。彼の著

作は組織的、系統的のものでなく、断片的で、熱血の迸る詩文的のものである。而して彼の學説は頗る徹底したる個人主義で、且、現實主義である。

强者道德の主張

是れより先、スチルナーが個人主義、自我發展の先驅を爲し、其の自我生活に關する學説に於てはニイチエの師たる觀があつた。彼は自我主義の尊嚴を説明するに神の標本を以てした。曰く

『神は自ら最も高く大いなるものと爲り、自己以外の一切の權威を認めない、即ち神は自我主義者である、我我は神の道を實現せんとする者である以上、即ち完全なる自我主義者でなければならぬ』

自己自身の權威を限りなく發揮して見やうと云ふ彼に於ては、自己が何物よりも尊貴

のものと自覚し居るは當然、そして神が自己の讚美者であり、自己の鼓吹者である以上彼自らも自己を讚美し、鼓吹し、發展せしめずんば已まぬのも、自然の勢であらう。彼の自我生活は神の自我主義から其の模範を取つた。

ニイチエに至つては、其の個人主義から出づる『力』の福音を説くこと更に痛切を極めてゐる。シヨツペンハウエルの所謂盲目意志説を排して、ニイチエは権力意志を主張した。人間の本能を基礎として、生存慾の積極的發展を爲すべきものとし、自己擴張の爲めに存分の力を發揮せよ。其の力が直ちに善である。力の發揮は又人生の戦である。その戦が又直ちに善である。凡らゆる抵抗に打勝つて、之を征服し、戦利を博するは最大の幸福である。單なる満足に非ずして、権力の勝利を得ることのみ善であり幸福である。之に反して、力弱く、戦に敗れ、抵抗を怖るゝが加きは悪であり不幸である。人に遠慮なく、神にも懼れず、獅子奮迅の勢をもて猛進し、能力の凡てを發揮して、剛健に

勇敢に戦ふべし。この力戦あつて後始めて『超人』を生む。自然淘汰の結果、超人の專制的社會を現出せしむることが人生の目的であり、理想である。これが強者道徳であり、自由であり権利である。強者道徳に服従するのが弱者道徳で、生存の戦に於て進化したる結果は個様のもとの爲る。國家も道徳も、乃至神も要らない。國家は不自然である。道徳は虚偽である。神は死んだ。宗教は人間の眼前寸地に平安を與へやうと云ふ妥協的方法のものである。妥協は斷じて容さない。唯汝自身であれ。人間を是等の拘束より解放せしめよ。眞文明を自覺せしめよ。進化の理法に背く宗教道徳其他制度は超人の出現を妨ぐることに甚だしいもの、人生は決して平等に非ず、謙讓すべき理由もなし、慈善を施す必要もなし、弱者は只強者に従はしめよ。道徳や制度は其の時代に應じて一時的に必要を促がされたものに過ぎない。決して固定永續せしむべきでない。之を存續するは理想的進化の障害と爲るばかりだ。只生活本能の命する處に隨ひ、勇往邁進、猿から人

間に進化したる如く、人間から超人を生ましめよ。而して理想の社會を出現せしめよ。是れが彼の主張であり道徳であつた。權力意志の徹底せる發揮を唱へたものである。そして是れが取りも直さずニイチエ式威力生活法である。超人の域に達すべき階梯として彼は『高人』なるものをも假定した。ナポレオンの如きは既に自ら超人に達したものであると激讚した。

月並道徳に對する諷刺

ニイチエの主張は随分思ひ切つてゐる。『神は死んだ』の一句、これで彼の意氣込は充分了解される。彼がこの主張を試みたる當時は、シヨツペンハウエルと同様、餘り重きをおいて、歡迎もされず、寧ろ一狂言者として冷かに見棄てられたかの觀があつたのであるが、彼の

死後漸くニイチエ研究の熱が高まり、漸次世界の思想界に反響して、自ら小ニイチエを以て任じ、超人に擬し、高人を氣取るやうな人々も各處に現はれて來る。舊時代、舊道徳に反抗して、危険性を帯びた言動を爲す者も尠くないやうになつた。

中にはニイチエに對する痛烈な批評を試むるものもあつた。『吠えつく犬は噛みつかぬ』など云ふて、彼があつたやうに大膽な咆哮を爲したにも拘はらず、自ら其の説の如く實行しようとはせぬとか、シーザーやナポレオンの如き勇者は、自ら公言はせぬが實行してゐるとか、彼は單に時代の弊風を憤り、之に對して極度の諷刺的批評を試みたに過ぎないとか、様々な評判はある。

我等は彼の説に對して殊更是非の判斷を試むることをせぬ。我等の提唱せんとする『大威力生活』に於て、親しく人界と法界との交渉を觀するならば、是等の哲學思想に含まれたる根本の意義も、又その去就を決すべき我等の態度も自ら肯定されることを確信

するが故である。

ニイチエは自らナポレオンたりシーザーたるの實行威力を發し得ざりしと雖、兎も角も従來の所謂道德、乃至制度等に對しては、前代未聞の痛快なる批評を與へることが出來た。そもく人間の眞價を定めるには、道學先生の鑑定法に依る處の月並批評、即ち學問は何程、素行は如何、經綸は幾何、度量若干、合計何某と、藥局流の算定を爲して、も分るものでない。又徒らに慰安と施物とを以て『眼前寸地の平安』を與へるのみでは、人間の根本的救済が出来るものでない。弱者貧者に對しても、單なる同情心のみでは、彼等の向上を促がすことも出来ない。不満足なる平和を保つて、人間を無氣力卑屈に陥れるやうでは、社會は決して完全なる平和の域に達し得られない。本然の慾求が限りなく増長せんとする人間の生活意志に對して、單なる節制壓抑のみ強ふるは、到底穩健なる處置とも思はれない。所詮人間は生きてゐる。生々躍々の氣片時も已むことなき活物

であり、動體である。一ト筋繩で縛り切れる、簡單な代物ではないのであるから、何等かの偉大なる力に依て、彼を指導し、彼を支配して行くに非ずんば、絶對の平安は得て望み難きのみか、強ひて之を制御すれば、人間自身の光榮である處の勢力を滅殺して仕舞ふことに爲る。眼前偷安主義は斷じて人道の致美でない。この意味に於て、ニイチエの威力主義は確かに頂門の一針だ。

ニイチエ以後に於る個人主義、自我主義、肉慾論等に關しては更に別項に於て詳論する

トライイチケ論

獨逸魂の原動力たり

個人主義の上に立つて威力生活を主張したニイチエの議論は、固より哲學的のもので

あつて、眼中國家も制度もないが、トライチケに至つては、威力主義を國家の上に適用して、國家的威力生活を主唱する處の政治論であるから、同じく威力意志の尊嚴を有すと雖、彼我の主張は自ら出發が異つてゐる。

トライチケは一八三四年ドレスデンに生れ、陸軍將官の子であつたため、少年時代より彼の性格は軍人的と爲り、其の言動には頗る蠻味を帯びて居た。長じてポーン大學、ライプチヒ大學、チューインゲン大學及ハイデルベルヒ等の諸大學に學んだが、其の目的は歴史と政治とであつた。決闘狂の故を以てハイデルベルヒ大學から放逐され、ゲツチンゲン大學に入つて之を卒業した。後ライプチヒ大學の講師と爲り、權力政治の國家論を講じ、普魯西史を論じ、獨逸統一論も大いに論究した。更に諸大學に獨特の政治論、歴史論、聯邦論等を無遠慮に論講し、彼の過激なる議論に反對した父とも大いに争ふことがあつた。一八七一年彼は帝國議會の議員に當選し、自ら政治舞臺に活躍するの機会

を作つた。壇上雄辯と紙上の言論とを共に操つて、彼の名は益々顯著なるものと爲つて來た。一八七四年にはベルリン大學の教授と爲り、彼の有名なる十九世紀獨逸史の完成に勵むことゝ爲つた。同大著述は世界の最大史家ランケと並び稱せられるほどの聲名を博し、ビスマルクの政治的偉業と好一對だともまで激賞されてゐる。現獨逸魂の根本動力を與へたのは彼である。世界大亂の勃發を將來したのも彼であると云つて宜しい。彼はニイチエとも親交あつたらしいが、後年はニイチエを排斥してゐる。

人民に聽く必要なし

小さな數多の社會が互に對峙抗爭するは、人間の天性に出づるものであつて、是等小社會の自主的權力を有する團體と爲つたものが國家であり、その國家は戰爭の觀念を有し、威力の上に立つて居る。威力に富む處の國家は克く安立することを得べく、威力

なき弱小の國家は他に征服さるゝのが當然である。國家は戦争に生き、國民は國家の威力に支配せらるゝものであると彼は云ふてゐる。

尙國家と國民との關係に就ては個様に云ふ。國家は單に人民の總計ではない。民主政治や政黨政治は決して完全な政治ではない。國家は人民の上に超然として立つてゐる。人民を包容し、保護し、そして發展せしむる處の權威である。國家は人民の意志に聽く必要はない。人民に對して絶對的服従を強要すべきものである。國家には國格あると、個人の人格の如きものであるから、機能的活動力があり、そして最大なるものである。國家は人民に對して成るべく干渉を避け、その自由の範圍を擴張せしむべしなど云ふ議論は國家生活の精神を無視したものである。國家の主觀的能力を没却した説である。國家の衰滅は戦争によりて救ふことが出来る。戦争一たび起れば個人は皆その生命を犠牲に供して猛進するやうになる。戦争の尊嚴は茲だ。

更に君主觀に於て次の如く云つてゐる。曰く、民主主義乃至政黨政治など云ふものは國內の勢力を分裂せしむるものであるから、國家に取つては却て危険のものである。國民は只黙して國王の命を遵奉すれば好い。國家の統一は軍隊によつて出来る。そして君主は軍隊の大元帥である。獨逸皇帝は世界各國に於て最も卓越せる、そして眞正の君主であるから、國民はその命に遵つて、君主の尊嚴を増し、國家の威力生活を助くべきものである。歴史上君主國は共和國に比して公正である。君主は其の卓越せる地位に立つて、眼界を廣くして居るから、一般人の偏執的見地に在るものよりは公正にして且つ精密に社會を評價し得るものである。従て國民は君主の權威に信頼し服従することに依つてのみ政治上の安心を得られる。

彼は現代獨逸の母也

ニイチエ及其の説に類似したる學者の議論は、當時左程の大歡迎も受けなかつたが、彼等の歿後は豫想以上に反響して、世界の思想を風靡せしかの觀を呈した。因習道德に對する反抗熱に點火されたるが故であらう。若くは民主、自由、平等、平和等の説が少しく飽かれ來れるのと、種々なる弊害もこの中から發見されつゝあつたのも主なる原因と爲つて、反動的傾向が人心に潜在して居る處へ、痛烈なる批評が彼等に依て試みられ、風雲の志ある者又は奮闘生活の勝利の分量を多くせんと焦慮しつゝある人々に對し、眞の味方を與へたるが故であらう。

個人主義の上に立つた強者道德の思想が、個様に人心を動かし、姑息なる平和の夢を打開して、生活上の闘志を鼓舞したりと雖、尙未だ彼等の鼓吹のみでは今日の所謂新獨逸魂の如きものは出來なかつたのであるが、トライチケ及同種類の論者が、強者道德の思想と威力主義の生活を直ちに移して國家的のものと爲すに至り、いよいよ夫れが實

行的のものと爲つて來た。ニイチエの哲學的批評は、靜かなる大海に一波動を與へたるが如きもので、其の波及する範圍は極めて廣いが、尙未だ纏つた一勢力を構成するには至らなかつた。然るにトライチケに至つては、威力生活は國家自身のものであり、君主絶對權であり、民意不聽問であり、而して獨逸皇帝のみ特に完全なる君主であり、權威者であつて、他の弱小國は當然其の被征服者であり、強國と雖、獨逸に反抗するものは當然併呑せらるゝの運命を持つて居ると云ふやうに説いてゐるのであるから、彼の國の團結を鞏固にし、君主權を確保し、國民を鼓舞振興する上には、遙かに組織的であり、又活動的である。今日の獨逸に於ける軍人、官吏は云ふに及ばず、皇帝自身も、國民の凡ても、自ら世界に於ける最大威力者の立場に在るかの如く感じ、世界文明の中樞を握つて居るかの如く思惟するに至れるも、主として彼の這の政治論及歴史論の賜である。此の意味に於てトライチケは現代獨逸の母であると云つても可い。

直ちに其の説を體現して、國家的威力生活の實行を試みつゝあるものはカイゼルである。少しく其の所謂經綸及奮鬪振を眺めんか。

カイゼルの威力生活

カイゼルは現代に於ける一個の英雄である。彼自身がナポレオンに擬し、若くはナポレオンを輕視して、それ以上の偉器を自ら具へ居るものゝ如く粧ふは聊か僭上に過ぐるが、尠くも史上の英雄に類似したる型と力とを有することは疑を容れない。トライチケの歴史論及政治論は獨逸現代の人心を支配すること頗る大なるものありて、カイゼルも亦彼より受くる所の感化を、國民よりも一層強く把持して居るに相違ないが、カイゼルはトライチケの感化以外に於ても、殆ど先天的に英雄的素質を有し、其の青年時代よりして、疾くカイゼル式本領は發揮されて居つた。

鐵血宰相ビスマルクに對しては甚だしく敬服して居つたにも拘はらず、カイゼル自身の胸中に經綸を描かるゝやうになつてからは、早くも一八九〇年の頃、大宰相に喰つてかゝり、其の死守し來れる社會黨鎮壓法もカイゼルの爲めに斷然廢止することゝなり、露獨秘密同盟もビスマルクの意見を拒否して、廢棄せしめた。從來の慣例に依りて、勅令は凡て大宰相の副署を要すべきものであつたに拘はらず、この頃よりカイゼルは副署を抜きにして、恣に勅令を煥發し、各省大臣と直接協議することゝ爲つた。ビスマルクは先帝の遺命にも背くものとして大いに之を否とし、皇帝と反撃すること屢々であつたが、遂にカイゼルの一斷、この種の勅令は改正せられ、絶対に獨裁的權威を保持することゝ爲つた。ビスマルク憤然辭意を洩せば、皇帝即ち辭表提出を命じて、咄嗟の間に大宰相の政治的勢力を奪還して仕舞つた。そして爾今一切の政務は朕の掌中に存する旨、特に宣明することゝ爲り、朕の意に反抗するものあれば、容赦なく粉碎し去るべき由を

臣民に傳へたのである。ビスマルクが彼を持って餘したのは、單に腕白王としてのみではなかつた。青年皇帝の胸中、既に自發的威力主義が醗酵されてゐたのである。

カイゼルの天資既に明敏果斷、君主獨裁の威力を揮ふに充分であつた上、トライチケ等の政治論に於て、權力意志が獨逸國の專有であり、獨逸皇帝の特權であるかの如く鼓吹さるゝに遭うたのであるから、カイゼルには鬼に金棒の福音でなければならぬ。

彼は先づ自己の尊嚴を認識せしむる爲め、神の名に依て絶大の形容を試みた。

『ウイールヘルム二世は神慮によりてホーヘンツォルレン家に生れ、獨逸國民に君臨す、獨逸憲法の規定に據り偶然即位したるものに非ずして、神の特別なる意思によりて即位し、世界統一の使命を神より授けられたものである』

同時に他の國家の元首を輕侮し、之と比較して自己の特別なる尊嚴を認めしめんとし、左の言を發してゐる。

『彼の露、英、澳、其他世界各國の帝王又は大統領の如きは、人爲の後天的に薄弱なる基礎の下に樹立せられたる元首であつて、何れも僭稱の沙汰である』

帝權の意義を説いては

『獨逸帝國に限り帝權即ち神權、神權即ち帝權であつて、朕を侮辱する者は直ちに神を侮辱するに當る』

と傲語して居る。而して此の神意に出づる皇帝の下に生活する人民は世界に於て最も幸福なものであると云ひ、この皇帝に對しては守護神としての敬意を拂ひ、絶對的服従の美德を守るべしと強ふるのである。同時に又國民の光榮を感じしむる爲めには

『神慮によりて世界統一の大事業を遂げんとする獨逸皇帝は、絶對神聖の大皇帝であつて、獨逸國民は這の大事業遂行上最も完全なる人民として神が選定し給ふ處のものであるから其の權利と名譽のために獨逸皇帝及神に對して充分なる崇敬を拂はなければ

ばならぬ』

と云ひ、陸海軍人に對しては特に強き意味を以て其の服従を要求してゐる。又彼の所謂神意による處の世界統一は如何なる形に行はるか云ふに、全世界の組織を悉く獨逸式に改革し、全人類を獨逸的人民たらしめ、法律、道德、宗教、學術、風俗、習慣等凡て社會的個人的生活に必要なものは獨逸式に改造すると云ふのである。而して世界が獨逸式に改造されたる時は、世界が絶對的平和を現出し、豫想すべからざる理想が地上に築かるゝことゝ爲るべしと云ひ、是れ即ち最善の政治であると誇張してゐる。

彼の説明は随分思ひ切つてゐる。そして頗る徹底してゐる。其の言はんと欲する處を、無遠慮に、無邪氣に大言して憚らぬ態度は、恰かも紅顔の少年が空中に理想を描いて、我獨り茲に達すべしと云ふが如きものがある。乍去、彼の大言は單なる誇大妄想として、笑殺し去る譯には行かぬ。彼は帝冠を除いて、赤裸々なる個人として見ても、相當の識

見あり、抱負あり、勇猛心あり、而して英雄的威力を具へてゐる。彼の思想は英雄的に出来上つてゐる。

『凡庸なる百の政治家、百の戦術家、百の法律家、百の哲學者、百の宗教家、百の藝術家、百の科學者、百の詩人、百の教育家を有せんよりも、偉大なる天才的一の政治家、一の戦術家、一の法律家、一の哲學者、一の宗教家、一の科學者、一の藝術家、一の詩人、一の教育家を有する方遙かに有益にして又遙かに幸福である』

と云ふを以て見れば、彼は飽くまでも天才主義、英雄主義を懷抱してゐるものに相違ない。輿論的、共和的、民本的政治は彼の好まぬ處である。從來の所謂自由、平等の思想は彼の水火相容れぬ處である。彼は權力、威力の上に立つて生活し、又民衆をして之に甘んぜしめなければ承知せぬものである。彼自身の全部が英雄的精神に充ちてゐる。

ニイチエは個人的威力意志を主張した。カイゼルも個人としての威力主義を存分に發

揮してゐる。トライチケは國家の上に權力生活を認めた。カイゼルも亦國家の絶對的權力生活を主張し、實行しつゝある。彼は恐らく私かに『超人』の模型を以て任じてゐるであらう。同時に又『戦争に生き』てゐるのであらう、彼は個人威力と國家威力の二つを體現し、ニイチエとトライチケの二人を丸呑みにしてゐるかの觀がある。彼は個人として立てば、他の凡ての人を奴隷の如く屈服せしめずんば止まず、國家の上に立てば、他の弱小國を悉く屠るが當然と心得、人は皆吾が命令の下に置き、國は皆吾が支配の下に置かずんば已まぬ底の抱負と野心、それが皆神の意志によつて行はるゝものであるぞと公言するに至つて、其の風呂敷の大きさ加減は古今を絶してゐる。

カイゼルの大言は天下の珍にして、其實際威力も相當に發揮され、世界は其威力に感じて、彼が威力主義の或は透徹すべきかを畏怖せしむるまで、之を實にした。然らば彼の威力主義が結局、最後の勝利を博し得るだけの價值あり、實力あるものであらうか否

かに就て一應攻究して見ねばならぬ譯であるが、我等は這の研究の眼をカイゼルに向つて放つよりは、より大なる眼を開いて、彼等の威力そのものを無視し超越したる、常識判斷の外なる絶對的大威力を認識する方遙かに捷徑であると思ふ。愛鷹山の大いさを見るは富士に登るに若かない。以下順次『より大なる威力』の研究を試みるであらう。

三 オイケン論

精神生活とは何ぞや

我等はニイチエの威力意志を以て、必ずしも利己的なりとして之を輕侮はしない。又トライチケの戦争論やカイゼルの世界征服論を以て、必ずしも無意義なる妄論として之を否定はしない。乍去、オイケンの精神生活論に於ては、聊か『生活』の舞臺が擴張さ

れたかの觀を催さざるを得ないのである。オイケンの活動は、人生そのもの以上、全宇宙の上に立ち、人間生活と同時に法界生活をも試みんとするものであるから、物質の上、若くは現實の中にも偏執する前者の議論よりは、包容が大きいやうに思はれる。彼は如何なる人物であつたか。そして如何に其の精神生活を主張したか。

彼は普國一八四六年アウリヒに生れた。ニイチエの誕生に後るゝ二歳、ゲツチンゲン大學に哲學を専攻し、更に柏林大學に學んだ。後パーゼル大學にニイチエと共に教授たり。更にイエナ大學に轉任して今日に及んだが、其の性、情熱に富み、學者と云はんよりも寧ろ宗教家風である。『精神生活存立の戦』人生の意義及價值『自然主義か理想主義か』等、名著頗る多し。その學風は從來の哲學者が、認識論だとか、辨證法だとか云ふて、哲學の爲めの哲學論を吐いて日を暮らしたのに比し、専ら常識の上に立ち、通俗的に、達意的に、平易な解釋を試むる點が特徴であらう。

宇宙間の活動力を精神生活と名づけ、而して這の靈力は又自己の中心に神性として存在するを認め、無窮にして不滅なる其の活動力を自覺して、之に觸ることが人間の眞の生活であると云ふ。換言すれば、自分自身の根柢そのものを得んとして不斷の努力を爲し、世界を力強く攝取することが即ち人生であり、生活であると云ふ。

生活と活動によりて、這の精神を直覺し、自己そのものを得れば、即ち是れ理想に達したのである。是れに達せんと欲して、絶間なき努力を試むるは人生の戦である。精神生活に入るは即ち此の戦に勝つことである。試みに人生進化の跡を考慮せよ。人類以上、萬有以上に儼として獨立の精神生活が存在して居るではないか。之を自覺し、之を得て、勝利の感を懐く時、人生は至極の理想に達すべく、之に遠かり、之に敗れて、物質界の擒と爲るものは不幸である。大いに戦はざるべからず、大いに生活せざるべからずと、個様に彼は説く。

要するに目的は生活の發展と、活動の完成に在りて、精神生活を直覺的に捉へよと云ふのであるから、單なる英雄的な生活よりは確かに規模が大きい。威力も頗る徹底的に感ぜられる。但懺むらくは、彼ほどの大議論も、理想の描寫と、之に對する憧憬あるの外、達せんが爲めの活動に於て、具體的指針が示されてない。理觀のみあつて、事觀が具はらない。千言萬語の美辭はあれども、一超直入の道が開いてない。

眞如の都近くして遠し

自己の根柢には神性があると云ふ。如何にもあるであらう。それが宇宙の活動力と渾融してゐると云ふ。如何にも渾融してゐるのであらう。之を直覺して精神生活に入れば無窮の生命を得ると云ふ。如何にも得るであらう。其の説を爲すや甚だ易く、其の理解を得るや頗る易い。常識の上に立つた理窟なら常識ある人に依て速かに理解されること

は當然、問題は言下に解決されてゐる。借問す、然らば其の説を爲し若くは之を理解する常識なるもの、本體は、天地の秘密を發き、人生の大道を開くの論であるか否か。有形無形、色界無色界の一切を明かに映じ得るの鏡であるか否か。無漏智の大慧であり得るや否や。茲が問題だ。我等は今や開き直つて、人間の根本正體を研究してかゝらねばならぬことゝなつた。足元の用心が先づ肝要。

常識と云ふ言葉の外に、『觀念』とか『現識』とか『寫象』とか云ふ如き素成分的の『識』が先づある。この識の字の根源に遡つて、達觀的認識を作らぬ以上、何を考へても無茶苦茶識に爲つて仕舞ふ。識とは何ぞ。これは『了別』の意義で、之により對境の事物を照して行く。之を幽玄深遠なる佛教哲學の上から見れば、左の如きものと爲る。

識を構成する前に先づ『塵』と云ふものを認めねばならぬ。塵は染汚の義で、對境たる物質的のものが人の感覺を刺戟し、其の好む處を食ひ、其の忌む處を斥け、種々なる

煩惱を起さしむるの種を與へる。

(一)色塵 顯色、形色の別あり、其の色と形の作用が自然物、動物、人造物、乃至人間の男女風姿等に現はる。

間の男女風姿等に現はる。

(二)聲塵 自然物、動物、人造物の聲、乃至人間の男女歌謠、歡樂、悲嘆等の聲。

(三)香塵 自然物、動物、乃至人間男女の香等。

(四)味塵 自然物、動物の味、及び人為的飲食の味等。

(五)觸塵 剛柔、冷熱、粗細、乃至男女の觸等。

(六)法塵 前の五塵が各々其の性、體、相等のまゝに觀念により、好惡の感覺を生ぜ

しむ。

この六塵を知覺する器官としては『六根』と云ふものがある。後の『識』を生ずること
恰も根の草木を生ずる如くであるから『根』と云ふ。

(一)眼根 諸の色塵を見て眼識を生ず。

(二)耳根 諸の聲塵を聽いて耳識を生ず。

(三)鼻根 諸の香塵を嗅ぎて鼻識を生ず。

(四)舌根 諸の味塵を味つて舌識を生ず。

(五)身根 諸の觸塵を覺つて身識を生ず。

(六)意根 法塵の好惡を分別して意識を生ず。

以上の六根が六塵を所對として生ずるものが知覺と觀念と爲り、『六識』を生ずる。

(一)眼識(一識) 眼根が色塵に對し眼識を生じて色を見る。

(二)耳識(二識) 耳根が聲塵に對し耳識を生じて聲を聽く。

(三)鼻識(三識) 鼻根が香塵に對し鼻識を生じて香を嗅ぐ。

(四)舌識(四識) 舌根が味塵に對し舌識を生じて味を知る。

(五)身識(五識) 身根が觸塵に對し身識を生じて觸を覺る。
 (六)意識(六識) 意根が法塵に對し意識を生じて五塵の境を取捨分別する。
 更に六識が土臺と爲り、六根を所依として、積極的に六塵を求める處に、『六入』と云ふものを生ずる。入は趣き入るの義。

- (一)眼入 眼根が眼識の所依と爲り色塵に趣き入る。
 - (二)耳入 耳根が耳識の所依と爲り聲塵に趣き入る。
 - (三)鼻入 鼻根が鼻識の所依と爲り香塵に趣き入る。
 - (四)舌入 舌根が舌識の所依と爲り味塵に趣き入る。
 - (五)身入 身根が身識の所依と爲り觸塵に趣き入る。
 - (六)意入 意根が意識の所依と爲り法塵に趣き入る。
- 法塵は所謂『印象』で、之に對する分別推理の智、好惡の情、去就の意等を生ずるもの

は皆意識の働きであり、法塵に對して意入の強きものは記憶が強く、意入の弱きものは記憶が薄し。

六識の後には更に第七識、第八識を経て、九識心王眞如の都と爲るのであるが、普通人間の心は皆、この第六識の分際であつて、前五識から起つて來る色々の事柄を領納して、之に對する總合、分解、記憶、想像、推理を爲しつゝあるのが我等の日常生活である。六識の上には、貪、瞋、癡、慢、疑、身見、邊見、見取、戒取、邪見の見惑十使と、別に貪、瞋、癡、慢の四が、三界、四諦に歷て、八十八使、八十一品の煩惱と爲り、之より業を起し、業因によりて六道の苦果を作り、苦果また煩惱を生じ、また業を起して苦果を招ぎ、廻り廻つて果しもない。

之を精算するならば、五利使、五鈍使の十使の煩惱があり、各十使を具して百使となり、過去、現在、未來に存續して三百使、過去と未來の各一百使には又各十使を具して

二千使、現在を合して二千百使、それを貪、瞋、癡、慢の四種の衆生に約して八千四百使、更にそれを四大、六衰に約して八萬四千の煩惱と爲る。

一步を進めて其の性質から分別すると、『三惑』と云ふものがある。(一)見思(二)塵沙、(三)無明の三惑即ち夫れで、見思は見惑と思惑との二、それが第六識の中に在り。塵沙、無明は第七識(末那識)第八識(阿頼耶識)の中に在り。別に第八識に入りて最後、元品の無明なるものもある。是等凡ての惑、無明を悉く破し去つて後、始めて第九識(菴摩羅識)心王に達するのであるが、我等凡夫の分際では、その最下劣なる見思の限界を出で居ない。

見思は三界有漏の惑と云ふて、六道生死の基であり、日常生活の材料である。塵沙、無明も無論我等に具備しては居るが、凡夫の低級なる分限として、之を起すほどの地位に進んで居ないのである。さて見惑とは諸見の惑ひで、事物に對する觀察の盲とも云ふべく、あれが宇宙觀、これが人生觀、あれは天道、これは人道、あれが實在、これが眞理など得手勝手な盲推量を試み、適晴れ哲學の奥義を極めたらしく考へる、此の有り合した誤判が即ち夫れである。思惑とは、貪、瞋、癡、慢の煩惱が性慾的に發生したものを云ふ。見惑が迷理の惑を爲せるものと違ひ、これは三界の生を受くると共に、色心に固有した俱生の惑であるから、生れ落ちるとから附いて來た所の煩惱である。見惑が法塵を縁して理を誤り、この思惑と相結んで、人心を攪亂し、生死の界に輪廻すること、爲る。

この惑を斷じて、第七識に入りても、尙、塵沙、無明の惑がある。之を十界の位から云ふと、聲聞、緣覺の心で、偏空の涅槃に入つても、未だ『我』を立派に脱してゐない。世を捨て、も自分だけ涅槃に入れば好いと云ふ、所謂小乗の分際である。

第八識に入つて、塵沙、無明を破するものは、菩薩の位、乃至權門、迹門の佛である

が、尙最後に元品の無明だけは存して居る。元品の無明の半面には元品の法性があり、無明縁起によれば個性は墮落して迷妄を生じ、法性縁起によりて根本的に無明を斷破すれば第九識に向上し、本佛法本門の一佛に融即する。と、一口に言へば、眞如の都へ到達するの一寸した張り合ひに過ぎぬやうであるけれども、而も六識の中に流轉して醉生夢死に暮して居る常識範圍の凡夫の智慧、その淺薄低級な果敢ない小智で、八萬四千の魔軍を片つ端から薙ぎ倒して行くなどは、謀叛も甚だしいことであつて、百年千年の奮闘努力何等のオーソリテイーを與へるか疑問と云はざるを得ない。

凡夫の分際でも、勿論元品の無明を持つてゐる。菩薩の心もある筈、之を一超した妙因妙果の佛性も無論ある。無明を破して九識の都に上り得べき素質は有して居る筈で有が、八萬四千の大軍に包圍されて居つては身動きもならず、一寸先きは眞の暗夜、手さぐりにさぐり歩いて、道窮まれけ通ずる處を知らず。盲人共が互に象の姿を批評するの

も同然、それが只の人間だから仕方がない。都は程近くあるやうで、而も却々遠いものだ。

溺れんとするの努力

オイケンなど云ふ學者は、決して普通の人間ではあるまい。その思索の範圍は、無學淺慮の凡人よりも遙かに廣く大きく、高く深くあるに相違なく、さぐり歩いた道も隨分遠方に達してゐるに違ひないであらうが、高級なる煩惱の『塵沙』と『無明』を破した經驗の有りや否や。更に『元品の無明』を起し、之をも斷じて大覺無漏智を得たることありや否や。而して金剛不壞の正信を築き上げてあるや否や。

彼は常識の上に立つてゐる。否、非常識の上に立つて居ても好い。兎も角も彼等の『識』なるものが、六根を所依とし、六塵を對境とし、六識を作つた、その第六意識、即ち『見

『惑』と『思惑』の範圍を一步も踏み出して居らぬことだけは、本法の鏡に照して昭々乎、疑ふ餘地もない。換言すれば、彼等が人間の迷妄、即ち煩惱を打破せんとして、其の解決法を示した『精神生活論』なるものは、始めから三惑未斷の凡夫識、即ち煩惱そのもの、上に押し立てられた議論であることは毫も疑を容れぬ處、其の千言萬語の美辭、巧言、畢竟するに、沙上の樓閣である。『迷中の是非は是非共に非也』。其の大なる聲は、所詮大なる煩惱の叫びたるに外ならぬ。

與へて言へば、六識の中にも比較的の善分子、善煩惱はあるもの、眞面目に學問をし、熱心に道を求むれば、其處に六識の範圍内に於ける聖人も賢人も出來上る。一步を進めて小乘の見地に立てば、見思の惑を破す。更に大乘の別教に入つて、塵沙、無明を破し、圓教に進んで無明根本を斷じ去れば、漸く光明の世界、大精神生活の眞諦を得られる譯であるが、學問の力や、月並の修行に依て、茲に達せんとするは、日暮れなんとして萬

億里の目的地に急ぐやうなもの、途中行倒れと爲つて、自己の脚の弱さを愚痴るより外に致方はない。偶々達し得たりと思ふ時は、迷宮の中に怪しき物影を認めたことを意味するので、奥の院は阿鼻地獄のある處、達せざるの優れるに若かずである。

高遠深妙の佛教大哲學でさへ、之を學問的に、所謂秩序的に、究め究めて自己本然の佛性、即ち眞如の都に達せんとすれば、百年千年の研究修行尙及ばぬと云ふことは、佛陀自ら誠められてある位だから、一般哲學、即ち佛大乘の大哲學に比して、遙かに遙かに低級なる哲學の指金を以て、九識の都までの距離を測量するなどは、僭上も僭上、寧ろ悲惨なる滑稽と云はざるを得ぬのである。奮闘努力、生活の戦闘など云ふと雖、六識の範圍内に於ける活動であるならば、それは恰も游泳術を知らざる人の水中に於ける活動と同様、活動そのものは溺れんとするの活動で、斷じて『生きんとするの努力』にはならぬのである。何等の威力をも發し得ぬのである。

論じて茲に到れば、所謂精神生活など云ふものも、畢竟して煩惱生活であり、流轉生活であつて、人生の根柢に對しては未だ何等のオーソリティーをも與へて居らぬことは分つた。懇つて序に、英雄的奮闘生活、超人的努力、乃至強者道德等に就て聊か吟味して見たいと思ふ。

彼等は皆只の人間也

ナポレオンの威力生活も、ニイチエの超人論も、乃至トライチケの戦争論も、カイゼルの神意説も、俗社會の弱者生活に比較すれば、其の議論に於ても行動に於ても、確かに威力的であり、壯烈であり、而して強者の尊嚴を或る程度までは發揮してゐる。人類も彼等の説に耳を傾け、國家も彼等の運動に驚異の眼を睜つて居る。其の説の可否を問はざるまでも、威力の上から見れば、皆共に堂に入つたものに相違ない。去年、一超して

大處より鳥瞰する時は、彼等と雖、未だ眞に徹底したる最大威力には觸れてゐない。腕力に於て天下無雙を誇るに足る猛者も、相撲道に達しなれば、國技館内に雄視するとは出來ぬやうなもので、彼等は個性に具した威力に於て、天下を驚倒せしむるに足るものがあるに拘はらず、人界あるを知つて未だ法界あるを知らず、人界的生活を營むも尙法界生活の大處に居せず、人間的に偏在するのみにして、人法一如の大生活には達せず、人間社會の藝術を解するも、未だ法界の大藝術を鑑賞せず、人間の作つた詩を味ふも、大千世界の微妙にして雄渾なる詩趣を味はず、詮する處は六識の中の比較大比較強、比較美を示し得たるに過ぎず。稍々驚くに足ると雖、大いに驚くには足らず。我等の朋輩の中の大きな友達を發見したるまでの話である。

彼等は何れも理想を描いてゐる。之に達すべく奮闘努力もしてゐる。そして或る程度までは達してゐるかの如く見えるが、彼等の理想に首尾よく達し得たる 曉には、駒が

出るか、蛇が出るか。理想境そのものは何のやうな姿に形成してあるか、理想を描いた藝術はどの手から出たのであるか、其の手はよく洗ひ淨めて、一微の垢も残さなかつたか。語を換へて言へば、彼等の人生觀なり宇宙觀なり、乃至國土觀なりを肯定した其の識見は、見思、塵沙、無明等の惑を斷破し去つた大智慧を具へたものであつたか否か。假りに疑へば、是れも疑問のやうであるけれども、この疑問は、彼等に對して驚いて見た場合の疑問であつて、若し冷靜に眺めて、少しも驚くことなしに、彼等を人間の仲間へ取り混ぜたまゝ研究して見るならば、大した疑問も起さずに済むのである。何となれば、彼等を擧げて悉く是れ只の人間であることを知るが故に。

大精神生活の提唱

既に我等は只の人間が發揮した威力生活を略眺めた。そして人間の「識」から出た精

神生活論をも聽く事が出来たが、結局見思の境を離るゝことは尙出来ぬことも分つた。然らば同じ見思の惑に捉はれてゐる我等煩惱の持主は、如何なる學問を研究し、如何なる努力奮闘を爲すも、無明の雲を拂つて理想に達することが出来ぬものであるかと云ふに、斷じて然らず。即轉即妙、煩惱の塊たる我等が煩惱身そのまゝを提供して、直ちに本法の都に生れ代ることの出来る只一筋の道は開かれてある。茲に達すれば、今までの忌まはしき煩惱も、頼み効ある菩提心と一變して、八萬四千の魔軍も皆味方の精銳と爲り代つて来る。其處に人間の案出した精神生活以上の大精神生活も現示して来る。大精神生活に達するの道は遠きが如くして、實は却て甚だ近い事をも覺り得るのである。然らば「達する」道は如何。

そもく元品の無明とは、我等の有する迷の中の最大、最深の迷であつて、普通には先づ順序として、塵沙、無明等の中級の迷を破して、然る後元品の無明に及ばなければ

ならぬ。否、その又前提たる最低級の見思惑を断じてからでなければ塵妙、無明にも手をつける暇はないのであるから、事が頗る面倒であるのみならず、断破の見込も到底つかぬのである。低級、中級の惑は抜きにして、短刀直入、元品の無明に飛び込み、之を断じ去つて、他の小惑は序の仕事とし、所謂鎧袖一觸で始末をつけるやうな手取り早い戦術があれば、これに越したことはないのであるが、幸なる哉、個様の秘訣は我等の師範たる大戦術家が、我等のためにチャンと發明し提供されてあるのだ。

これにも一ト通りの説明は要する。元品の無明に直入して、之を断ぜんとならば、先づ元品の無明なるものは如何なるものであるかを、一應伺つて見なければならぬ。元品の無明とは何ぞ。

『本佛本法を知らず、信ぜざる心』

即ちこれが元品の無明である。本佛本法は只の佛、只の法ではない。小乘、權乘、迹

化の佛や法ではない。根本佛教に現はれた根本佛、只一佛、無上無漏智の大覺世尊と其の本懷を示し給ふ處の根本法の意味である。人は之を信じない。信じないにも種々なる理由はある。外道の教に執するものも其の一、自ら僭聖僧上慢と爲るものも其の一、權迹の教化に満足してゐるものも其の一である。古來の大菩薩連でさへも多くは何處かに執して居つた位だから、凡夫の執著は寧ろ當然で、この元品の無明を起すことは又只では出来ない。所謂個性の發展や、自己中心の神性指摘位では決して動き出すものでないのである。

元品の無明は一切の無明煩惱の種と爲ると同時に、その半面たる元品の法性は一切の法性智慧の種と爲るものであるからこの法性を動かして根本的發動を促せば、元品の無明も同時に動く。或は無明の半面が著しく動き、反撥して一たび謗法に陥るか、或は法性のみ動いて、無明の發動は潜在し、氣の付かぬ間に法性が發展して仕舞ふ場合もある。

其の時の發動、即ち法性を動かすべき根本の力は何であるかと云ふに、それが最大の力で、根本佛教九識果分の『乗種』と云ふもの、その法性に點火して、無明斷破の大縁を與ふるのが所謂『下種』である。下種を受けた以上には、例へどのやうな大反抗を起し見た處が、種は漸次發育して、何時かは法性的の發動が起る。若し最大なる反抗を起して、元品の無明を徹底的に發動するならば、それこそ『邪見いよく頼みあり』で、却て濟度するには易いと云ふのである。法性のみ動いて、順應的に、直入するものは即座に本法の正信を起す。

既に本法の正信正念が起つた以上は、元品の無明は、その信力を以て斷ぜられ、即轉即妙して佛陀本懷の理想に入るのである。理想に達すれば、其處に大偉靈、大精神の感孚あり、大精神生活が即ち得られたのである。

乍去、この下種は如何なる乗種であるか、九識果分の種とは何を意味するか、本佛の本法とは何を指すかの研究に進むならば、それは我等の淺慕な研究力で之を研究するよりも、疾く大なる力を以て大なる努力を爲し、大なる道を開き、大なる徳を積まれたる我等の師範に聽けば、手もなく解決される。師範とは何ぞ。本佛本法の權化、本化上行の再誕、末法地涌の大菩薩、法ける法華經として、我等一切衆生の前に出現したる大聖日蓮その人である。

日蓮は九識の乗種を、妙法蓮華經五字七字の袋に包んで、末法萬年の一切衆生の頸に懸け、之によりて元品の無明を斷破し、之によりて元品の法性を發動せしむるの一大藝術を發案された。之によりて本化の信を起す時は、それが根本信と爲り、無上信と爲り、之によりて行する處の修法は九識の行と爲る。『日向記』に曰く

『法界とは十界也、十界即ち諸法也、此の諸法の當體が本有の妙法蓮華經なり、此の重に迷ひて衆生と爲れり、一佛乘より現じて分別説三するは、九識本法の都を立出る

也、さて路に九識に引入する夫を法華經とは申す也』

又曰く

『此の妙法の雨は、九識妙法の法體也、然るに一佛現前して説き出す妙法なれば、此の雨を下らすと云ふ也、其の故は雨ふらすと云ふは上より下に降るを云ふ也、仍て從果向因の義也、佛に約すれば、第十の佛界より九界へ雨ふらす法體也、ふる處もふらす處も眞如の一理也、識分では八識へ雨りたる也、然れば日蓮等の類、南無妙法蓮華經を、日本國の一切衆生の頂上に雨らすを、法の雨を降らすとは云ふ也云々』
個様にして、八識因分の根本心に向つて本化九識の乗種を降らし、種を付け、そして根本信、無上信に入らしめ、功德無量の絶對絶妙の都に導かんとするものである。
世間の所謂智者、聖人、大哲學者、偉人など云ふものは、凡夫的妄念を打ち拂つて、喃喃れ大悟徹底したなど云ふて見た處で、それは單に三惑中の思惑を斷じ得たと云ふに

過ぎぬものであるから、法門の大處より之を見れば、或る一小部分の成功を以て、兎も角も凡夫以上に出たと云ふだけの話である。小我を滅却したなど云つて見た處で、僅かに自己の恣なる感情を支配して、意の如く御し得るやうに爲つたと云ふまでの話で、矢張り思惑の斷だけ奏効した眞味に當る。見惑を斷じて、眞理に觸れたなど云ふは本氣の沙汰とも思はれない。況や塵沙、無明の惑をや。更に況や元品の無明をや。
大精神生活は、九識本法の都に於ける生活である。この都に居を定め、都を立ち出で、一切諸法を眺むる時は、眼に觸れ、耳に響くもの皆悉く吾が有であり、皆悉く活きて来る。

無明を切るの利劍

さて然らば、九識の都に上るべく、大魔王『元品の無明』を切るの劍は何であるかと

云ふに、前申す根本法の根本信、本門觀心の信、即ち夫れで、根本の惑たる元品の無明を斷するの威力を有するものは、只これのみである、根本惑を短刀直入的に斷破する處の法門が即ち『即斷無明』である。『御義口傳』に曰く、

『一念三千も信の一字より起り、三世諸佛の成道も、信の一字より起る也、此の信の字は、元品の無明を切る所の利劍也、其の故は、信は無疑曰信とて、疑惑を斷破する利劍也、解と者智慧の異名なり、乃至智慧とは南無妙法蓮華經なり、信は智慧の因にして名字即也、信の外に解なく、解の外に信なし、信の一字を以て妙覺の種子と定めたり』

實に信の一字は利劍である。疑惑あれば、無明の雲晴れず。本佛本法の根本信は八識心田の奥深き處に植ゑつけられ、元品を破して、然る後他の低級の惑を薙ぎ倒す、と云ふよりも、九識の都に入つた上は、其の清淨無垢の世界には最早塵一點止めぬのである。

『治病鈔』に曰く

『而るに此の三十餘年の三災七難等は一向に他事を雜えず、日本一同に日蓮をあだみて、國々郡々郷々村々ごとに、上一人より、下萬民に至るまで、前代未聞の大瞋恚を起せり、見思未斷の凡夫、元品の無明を起す事これ始めなり』

大瞋恚を起したのは、日蓮のお蔭であつた。そのお蔭を以て、見思の惑さへも未だ斷じなかつた凡夫共が、直ちに元品の無明を起し、大反抗、大反撥を見るに至つた。『これ始めなり』で、この時こそ八識心田に大下種を施されたる時、總て九識の都に導かるゝの時、根本信の發動する時、曾て無かつた一大事因縁が結ばれた時であるから、假令賛成して來ようが、反對しようが、孰れに向つても最早逃げることは出來ない。早かれ遅かれ、『種』は發育して、本化の收穫を見る時が來る。

奮闘生活の哲理

オイケン、自己そのものを得んが爲めの絶間なき奮闘を爲すべしと云うてゐるが、彼の奮闘には、九識の都を目標とする理想もなければ、之に達するための、斷惑の利劍も持たない。或は彼自身の理想、彼自身の利劍はあるかも知れないが、而も前條詳論する通り、六識の上に立つた理想や利劍である以上、其の理想は、世界の凡らゆる智者、賢人、聖人、偉人、乃至佛、菩薩を首肯せしむるに足るほどの大理想では斷じてあるまじく、又見思、塵沙、無明等の全煩惱軍を掃蕩し得るほどの切れ味ある利劍でもあるまい。然らば彼の所謂奮闘なり努力なるものに、誰が聞いても成程と思はれるだけの大哲理を有するか否か、大いに疑問であるとせなければならぬ。

奮闘生活をなさんとすれば、奮闘そのものをして徹底し究竟せしむるための哲學がな

ければならぬ筈である。これなき奮闘は、或る個性の満足を得んが爲めの奮闘であるから、その満足が得られると同時に、奮闘は中止される。若しその満足の到底得られる見込みなきを知るか、又は身命に及ぶ危難屢々至る時は、奮闘力を減殺される。都合によりては廢棄される。尠くも鈍ることは必定だ。ナポレオンがセントヘレナで、人間の凡らゆる弱味を曝露し、精神威力も甚だしく衰滅に歸したのも、彼に眞の奮闘哲理が無かつたからである。オイケンが高遠なる學説を發表し、純乎として精神生活に入るべく奮闘しつゝあつたにも拘らず、カイゼルの宣戦布告と同時に、自ら之に雷同して、今迄の友邦に對し、罵詈を極めたるが如き、彼の奮闘的主義が脱線したのではあるまいか。

奮闘哲學とは何ぞ。若しこの事を巨細に説明するならば、這の哲理のみを以て百千頁尙足らざる大議論とも爲り得るのであるが、今は其の事のみが目的でないから、最も簡略に、要を語るであらう。

前條申す如く、八識因分に本法の下種があれば、元品の無明に大動搖が起る。元品は根本で、其の信も不信も俱に根本的のもの、宿業もこれによりて動搖する。凡らゆる魔障も起る。心田の大波瀾、罪惡の總勘定と爲るのであるから、ともすれば、驚き狼狽して逆轉する。踏み止まつて向上せんとすれば、其處に萬難重疊して來る。奮闘は此の時に於て只の奮闘では濟まない。妙覺の都に入るか、阿鼻の大獄に墮るか、二つに一つ。凡らゆる魔軍、凡らゆる迫害、凡らゆる誘惑、凡らゆる危険と戦ひ戦つて、之に勝つか負けるか。大精神生活の上に復活するか、生死流轉の海に溺没するか。孰れにても人生の最大第一事、これを切り抜ける爲めの努力が眞なる奮闘生活である。『觀念勝る』故に大難また色まさる』で、大目的の前には大困難が當然に來るもの、而も『無量劫の宿業を今生に消す』ためには、如何なる大困難も排撃して猛進せねばならぬ。『日向記』の中に曰く

『法華經の行者 三類の強敵を堪忍して、妙法の信心捨つべからざる也、信心を以て眼とせよと也』

或は又

『難來るをもつて安樂と心得得可き也』

と云ひ、百難千難の來襲も、何の苦もなかるべきのみか、これあるが故に、宿業も消滅し、成佛も確かなるべしと云ふの大勇猛心、それが奮闘生活の生命であり、哲理である。九識の都に入つて、大精神生活を營むの前提として、先づ凡ての大難と戦ふの意義即ち是れである。この主義を信解し、悟了して、眞なる奮闘生活を續けるものは、假令セントヘレナに流されたとして、又假令世界中が鐵火の修羅場と化したからとて、豫定の方針、理想の追求、之に對する大勇猛、大威力は一寸でも減退するものでない。

三大威力生活

一 基督論

本舞臺の生活に入る

これまで擧げ來つた威力主義者中のナポレオン、ルーズベルト、ニイチエ、トライチケ、カイゼル等、夫々その立場に於て、又その議論に於て、能ふ限りの威力的言動を示し、世界の人心に尠からぬ感動を與へたが、オイケンに至つては、全く論調を異にし、生活の舞臺を人生以上に擴張せんと試み、時代思潮を大分動かした。乍去、これとて我

等の提唱した大精神生活の眞意義から見れば、限界の知れたもので、根本的法界の大舞臺に比して、尙その舞臺も遙かに狭い。彼を以て所謂威力主義者中に加へるのは考へものであるかも知れないが、兎も角も、その所謂『絶間なき戦闘』に依て徹底したる活動を、生活の要件と爲したる意味に於ては、矢張り一種の威力主義と見ても差支あるまい。基督に至つては、全く本舞臺に登つてゐる。其の生活も月並の社會生活でなく、月並の精神生活でもなく、世界的生活兼法界的生活に入つてゐる。地上の生活も爲し居るが、天國の生活も味つてゐる。彼は神の子として生活した。或は神の權化と爲つて現はれた。神の王國を地上に築かんとして宣傳した。人類の救主としての自覺を持つてゐた。殺されても復蘇つて道を説いた。大威力に非ずして何ぞや。

『往いて萬國の民にパプテスマを傳へよ、父と子と精靈の名に入て弟子とせよ』

『悔改と赦罪とは、エルサレムより始まり、萬國の民に宣傳られん』

と、世界的の傳道を宣言し、凡らゆる人の子を皆神の弟子たらしめなければ已まぬ底の大抱負を持つてゐたのである。而して又

『人の子おのれの榮光をもて、諸の聖使を率來る時は、その榮光の位に座し、萬國の民をその前に集め、羊を牧者の、綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち、綿羊をその右に、山羊をその左に置くべし、斯て王その右にをる者に云ん、吾父に恵まるゝ者よ、來りて創世より以來、なんぢらの爲に備られたる國を嗣げ……また左にをる者に曰ん、罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其使者の爲に備たる熄ざる火に入よ……此等の者は窮なき刑罰にいり、義しき者は窮なき生命に入るべし』
と、神に従ふ者と従はぬ者とを審判して、免れがたき賞罰を與へるぞと、個様に雄偉なる言を爲してゐる。這の大判は、一般の威力主義者などの中に求めやうとしても斷じてないのみか、古來の大哲學者中にも、恐らく茲に達したる大抱負を持したものは一人

も無かつたらう。宗教界に於ても、西洋史上、比肩すべきもの決してあることなく、佛敎史上に於ても、諸佛諸神の家元たる久遠本佛及其の直系相續者たる大聖日蓮を除いては、恐らく彼ほどの大いさは無かつたかも知れない。
基督教に於ける神の正體、並に其の宗教的及哲學的眞價如何に於ては茲に論究する必要を、必ずしも認めないが、兎も角も彼の高さと大きさと、其の力とを認識して、生活の舞臺を肯定しておけば好い。

共鳴者五億六千萬人

敎祖の抱負が大きいだけに、人類に及ぼす反響も頗る顯著なるものがある。一盛一衰の史的過程は抜きとして、最近其の敎徒の調査し發表したるものによると、少々算盤的に過ぐる説明ではあるが、アキスリング曰く

『英米基督新教徒数は一億を越え、歐洲の他の各國の基督新教徒数は六千二百萬、東洋基督新教徒數約五百萬であるから、全世界基督新教徒數は一億七千六百六十五萬、之に舊教徒を合すると五億六千四百五十萬、此外日曜學校生徒二千八百七十萬、青年會員六百萬を有して居る、過去十五年間の基督者の進歩發達を示せば、世界に於ける基督教徒の増加は三千百萬餘、内東洋は六十萬を増加した、……一世紀以前、英米の基督教會が僅かに百名の宣教師しか外國へ遣して居なかつたのに、今では二萬の基督宣教師を全世界に派遣してゐる。彼等によりて傳道、教育、社會事業等は各地に偉効を奏してゐる、一世紀以前、英米教會の一年の外國傳道、獻金高僅かに十五萬圓であつたが、昨年（大正四年）は米國だけでも四千萬圓の高に達してゐる、云々』

商賈繁昌の能書、驚くばかりの數字が示された。其の内容を今茲に吟味する必要もないが、兎も角、大なる偉人の感化は大したもので、他の威力主義者等の共鳴者の數から

見れば幾千百層倍であるのみか、眞面目な信徒に爲れば命がけの奮闘を續けてゐるのである。是れ單にナポレオンに擬し、若くは單にニイチエを氣取る口先の信者と趣を異にする處、因て來る力の源が全然違つてゐる。

今より我を見ざるべし

基督の威力が如何に只の人間から超越した絶大のものであるかは、其の反響より推察して見ても分る處であつて、而も彼が信念の威力を揮ひ、學者、長老、富める者、權勢あるもの等に對して、或は『地獄の罪人』と云ひ、或は『蛇蝮の徒よ』と罵り、又は『盲者』『禍の源』等と賤しめたりしたこともあるが、大體に於ては、彼の威力主義は消極的のものであつたことは争はれない。彼の教化に浴し、彼の信伏者と爲つたものゝ多くは、血漏に惱める者、萬殊の病に罹れる者、癩病の者、罪ある者、姦通せる者、負しき者、

瞽者、跛者、聾者等で、権力階級、智識階級の濟度には殆ど皆失敗してゐる。

『上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし、蓋、神より出でざる權なく、凡そ有るところの權は、神の立てたまふ所なれば也、是の故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり、逆く者は自ら其の審判を受くべし』

と云うて、権力の價値を嚴莊するに、神の意を以てしてゐる位だから、権力者の絶對權の前には、彼自身も畏敬して居たらしい。隨て國王が兇暴を逞うして神の道に反するやうなことがあつても、之に對する誠責の大權を彼は示して居らぬ。尠くも甚だ不徹底である。カイゼルが無暗矢鱈に神意を振り廻すなどの奇現象も、恐らく是れから胚胎して居るものではあるまいか。

彼は單なる個人に對しては、救濟の權を絶對的に保留して居るも、帝王に對し、國家に對して、根本的にして統一的なる大教權を揮ふとを敢てせぬ。この思想が基督教の弱

味の存する處で、歴史上、大権力者の爲めには、教權そのものを武器の如く取扱はれ、又單に政略の具として翻弄されてゐたことが二再ならずであつた。而して教徒はよく其の権力者の命に盲従してゐたのである。現に今回の大戦亂に於ても、絶對的平和論者であるべき筈の基督教徒の多數が、一齊に彼の暴戻慘虐を極めた殺戮を承認し、権力者の命令及其の行動を謳歌してゐるではないか。中にも『カイゼルよりクリスマスへの贈物』として、空中より白耳義の教會へ爆彈を投下したる如き、宗教上の最大侮辱をも甘受し、之に對してカイゼル糺彈の大責罰運動を開始されたことも聞かない。偶々彼等の中に、特別なる一見識を立つて、絶對平和論の提唱を試み、権力者の横暴に對して神の叛逆者と名づけつゝあるトルストイ一派の言動が異様に感ずるやうな有様ではないか。神の權は絶對であり。其の力は無限であるべき筈のものが、抵抗すべからざる權力を別に認めて、其の如何なる暴戻も默認しなければならぬと云ふに至つては、絶對とか、

無限とか云ふ意味も頗る灰色のものとなつて仕舞ふ。

基督が祭司の長、長老、學者、パリサイ、サドカイ等の力ある者共に大迫害を受け、彼等の到底神の意に従ふべくも見えぬことを知つた時は、長嘆大息して左の如く言つてゐる。

『噫、エルサレムよ、豫言者を殺し、爾に遣はさるゝ者を右にて撃つものよ、母雞の雛を翼の下に集むる如く、我なんちの赤子を集めむとせしこと幾次ぞや、然ど爾曹は好まざりき、視よ爾曹の家は荒地となりて遺はされん、われ爾曹に告げん、主の名に託りて來る者は福なりと爾曹の云んとき到るまでは、今より我を見ざるべし』
是れ全く絶望である。彼は宗教的大愛國者であつて、國民を皆感化すべく起つたにも拘らず、下層社會の凡衆の外、權力階級、學者階級に對しては全然失敗に歸してゐる。所詮彼の威力生活は大威力生活ではあるが、而も其の發揮は消極的であつた。消極的威

力生活であつた。

基督は弱者の友なり

基督教が弱者、貧者の友であつて、弱者、貧者の救済は成功してゐるが、強者、學者、富者等の濟度は意の如く行かないと云ふことに對し、教徒は頻りに辯解を試みんとするの傾向もあるが、現に彼等自身の本領とする處を聞けば、徹頭徹尾、弱者、貧者、病者、愚者等の憫れなるものゝみを對照として、之に全力を傾注してゐることが分る。

今試みに日本基督教宣傳の幹部有力者が、新聞傳道に依つて、其の代表的意見を發表したるものを藉り來つて、彼等の主張する處の一斑を見るならば、次の如き立證を得られるのである。其の説明に曰く（大正五年秋新聞傳道の一節）

『人は同じ境遇に生れざる限り或は強者となり或は弱者となる、優勝劣敗適者生存の

法則の行はるゝ爲め之を放任せば強者愈々強くなり弱者益々弱くなる、然し弱者も亦生命を維持して強者と共に幸福を願つ事出来ないもの乎、基督は一視同仁の教を説いたが就中弱者に同情を寄せられたから、其の周圍に集まつたものが弱者に多かつた、基督も弱者を救ふを以て其の使命となされ「康強なる者は醫者の助けを求めず唯だ病ある者之を求む、夫れ我が來るは義人を招くために非ず罪ある人を招きて悔い改めさせんがためなり」「貧者は福音を聞かせらる」と宣言せられた、基督の許に來たのは貧者や病者で基督は之を憐み悉く慰め癒して弱者の友たるを示された」

弱者、貧者が唯一の友である。弱者、貧者はよく救はれた。是れ基督の本領であり、目的であつた。我等は弱者、貧者に同情することを以て、之に同情するが故に、之を友とするが故に、基督自身も弱者貧者であるなどゝは決して云はない。弱者貧者等に同情するとは如何にも必要であり、當然であり、而して早く之を救助してやらねばならぬとを

感ずるに於て同様の所見を持ち得る。乍去、弱者貧者の中に強者、富者、學者、健者等があつて、常に前者の生活を支配し、壓迫し、蹂躪しつゝあることを知り、強者一人が弱者數千萬人に越えたる權勢を保持し得ることを知り、強者側の一進一退、一舉手一投足が全人類の運命を左右するほどの、恐ろしき威力あることを知り、而して強者側の兇暴、罪科の程度が弱者側の夫れに比し幾層倍なるかを知り、是れを放任することの甚だ危険なるべきを思ふ時、又一家の主人が強者にして、其の妻子の多數が弱者なりとし、妻子のすべてが信徒と爲り、主人一人が不信の徒であり、妻子は神の子、主人は惡魔の友となり、なほ且、一家は幸福に送り得べきかを思ふの時、弱者側に與ふることのみを以て一家一社會の平和を理想し得べきか否かに就き、一大疑問を起さざるを得ぬのである。

『康強なる者は醫者の助けを求めず唯だ病ある者之を求む』と云ふと雖、世の所謂康

強なるもの、即ち強者の心術には、病毒の浸染が弱者側の夫れに比して甚だしきものあるを思ひ、弱者の病を治するに輕藥を以て足るに反し、強者の重患に對しては最重藥最強藥を投ぜざれば癒えぬものではないかと思ふ時、恐るべき大患の強者を一抛して、輕症の弱者をのみ治療することが、人生の大衛生上、機宜を得たるものであらうか否か。是れ又大なる疑問とせざるを得ぬのである。

偉大なる威力は、人間社會の強弱を絶して居るものでなければならぬ。その大威力は之を人間に加ふるに當つて、比較上の弱者にのみ適當に加へられ、比較上の強者に對しては之を控えるなどの加減を爲すの必要果してあるや否や。地を拓くに弱小の雜草のみを薙ぎ倒し、強大なる樹木の幹根を抜き去ることなくして、能く耕耘の目的を達し得べきや否や。姑らく疑問は疑問のまゝ之を保留せん。彼等は又曰く

『基督教徒が慈善事業に熱中する所以は此の基督の自ら任ぜられた精神を繼承するか

らである、基督が弱者の友を以て自任したが敢て強者を敵とするが如き偏頗心は無かつた、強者が強者の自覺を以て來るときは之を退けたが、弱者として來る時は之を救はれた』

慈善事業は弱者、貧者、病者のための同情である。同情の發露は勿論純潔なる愛の表現であるべきもの、固より其の不可なる理由はない。乍去、是れも大に考へねばならぬ事情の存するものである。悪文明の下には弱者、貧者、病者の益々繁昌し來るが當然、事實亦之を證して餘りある處、彼等に對する同情、慈善の事業も愈々益々擴大せねばならぬことゝ爲る。弱者、貧者、病者の群がり出づる有様は、恰も洪水の汎濫して、濁流滔々たるが如き觀を呈し、之に對する應急濟度の慈善は、手杓子を以て其の水を汲み出し、辛うじて堤塘の決潰を防ぎ得べきかの如き、姑息の事業たるを免れず。汲めども汲めども、未だ會て濁流の減退する傾向を示したることは無い。施を以て彼等の生活に一

時的慰安を興へんとする、其の心術や稱すべしと雖、被救助者を無制限に製造しつゝある悪文明の勢力に對抗すべく、餘りに貧弱なる救済法である。餘りに枝葉の問題に過ぐる。況や之にのみ『熱中する』傾向を以て誇るに足るかの如く取沙汰するに至つては、將來の文明に思ひ及んで寧ろ戦慄せざるを得ぬのである。

貧者、弱者、病者を無制限に製造しつゝある、其の製造者は何物であるか。其の責任は何處にあるか。悪文明は誰が作りつゝあるかと、其の根源に向つて探究の眼を放つならば、社會主義者の所謂『社會組織の罪』も或はあるであらう。金權の横暴も或はあるであらう。權力の濫用も或はあるであらう。思想の混亂も或は一因と爲つて居るであらう。原因は勿論澤山ある。弱者の製造者は色々の方面にあるに相違ない。が、通じては矢張り『強者』の壓迫と見るの外はあるまい。強者が強者としての權威をより多く發展せしむれば、發展するほど、弱者の窮迫、弱者の増加が甚だしく爲る。國に於て然り、

個人に於て然り。強者の存在し、強者の活躍する限り、弱者側は浮ぶ瀬がない。と云ふ不幸の伴ふのが、放任された社會の趨勢である。放任とは強者の放任である。強者が單なる社會生存競争上の強者、自我發展の飽くなき戰鬥に於て、勝利を得たる強者、盲目的に名利を追求して、之を贏ち得たる強者、その意味の強者をその儘に一抛し置かるゝ社會は、永久に平和の理想を現實にすることが叶はぬ。百の弱者を救ふ間、一の強者が千の弱者を作り出すの時、救済と蹂躪の對抗は、所詮前者の勝ち得べき見込もなき處、弱者救済にのみ熱中するの頗る危険なることを思はざるか。

強者挫くべく富者救ふべし、學者誨ふべく權者救ふべし。社會の壓制者側に立てるもの、社會の指揮者側に立てるものにして、未だ眞なる道に觸れず、未だ神の意に従はざるものあらば、先づ以て之を破碎し、救済するが、眞の神意ではあるまいか。我等は基督の威力を以て神の權威を代表するものと首肯し、其の偉大なる抱負と、其の森嚴な

る審判との前には、地上の凡らゆる強者の威力も、物の數にもなるまじきことゝ存じ居たるに、『弱きものは救はれん』とか『貧しきものは神の道に入らん』とか云ふことを聞き、未だ『強きものを救はん』若くは『富めるものを神の道に引入れん』と云ふの積極的威力を示すの語に接せざるは、返すくも不審でもあり、遺憾でもある。『われ賢王と爲つて愚王を誠責せん』の徹底威力は、遂に基督教に於て求むべからざるか、噫！

眼前寸地の平安

ニイチエは従來の宗教を好まなかつた。彼は宗教家の意氣地の弱さを痛撃し、憎惡し、冷酷なる批評を下してゐる。曰く『宗教は眼前寸地の平安を與へて人間を喜ばしてゐる』と。彼の宗教觀は随分皮肉であつた。彼は佛教を排したと云ふ話であるが、彼の論調から押して判ずれば、佛教を見たとき云ふ意味は即ち小乗教を見たるの意味で、未だ大乘

の本佛には斷じて觸れてゐない。あの意氣込で大乘に觸れたら、必ずや『元品の無明』が動き出したであらうに、是れ無かりしは彼の大縁が乏しかつたと云ふものだ。彼の宗教攻撃は主として基督教に對してであつた。基督教は果して彼の云ふが如く、眼前寸地の平安のために専ら盡してゐる。前申す所の慈善事業に熱中してゐるなども、この眼前の事業に外ならぬ。我等は基督教徒が如何に眼前的努力に勵みつゝあるかを略々承知してゐるが、今茲には、其の眼前的の眼前的たる所以を最も露骨に説明し得る材料を借用して、參考に供せん。米國聖書會社の廣告文、其の最も信徒の意に投ずるやう趣向を凝らした能書である。要項を抜摘すれば左の如し。

- 一、悲しい時には
- 一、危険な時には
- 一、憂愁に沈める時には

大威力生活

約翰傳十四章
詩篇九十一篇
同 三十四篇

- 一、失望落膽した時には
以賽亞書四十章
 - 一、疑惑が起つた時には
約翰傳七章
 - 一、寂寞や恐怖を感じる時には
詩篇二十三篇
 - 一、感謝の心が乏しく爲つた時には
同 百三篇
 - 一、失敗に歸したる時には
羅馬書八章
 - 一、神よりも此の世が大きく見える時は
詩篇九十篇
 - 一、安息と平和を求むるならば
馬太傳十一章
- 擧げ來る處一として弱者の友、悲哀の友、不安の友ならざるなく、其の目的も亦『眼前寸地の平安』的ならざるなしで、人間をして偉大なる威力の持主たらしむる爲めには、餘りに消極的ではあるまいか。

二 回 祖 論

彼の威力も大威力也

マホメットは武装したる宗教家であつた。其の劍の權威を發揮して、彼自身の道を拓かんと努力したる態度は、殆ど一般義人の憤起、若くは英雄の革命運動と同型の如く思はれた。乍去、彼は飽くまで宗教的生命を、其の中心に貫いて居つた。彼が最初に不信の徒と接戦したのは、コレイシユ族の一軍を撃破したる時であつたが、當時同族は山上より殺到して、回教徒の軍中に亂入せんとした。之に對して彼は叫んで曰く

『神よ、我等が若しも彼等の爲めに破られたらんに、地上に於て爾を拜する者は誰ぞ、我等の軍勢よ、勇めよ進め、今日の勝利は誓つて我等に歸せしむべし』

同時に彼は祭壇に立つて天使の來援を祈願した。彼は祭壇に在つても、其の視線を戰場より外さなかつた。聽て敵の攻撃急を告げ、味方は其の壓迫に堪えざらんとするの危機に迫つた時、彼は祭壇を下りて、馬に跨り、地上の砂を掴み、天に抛つて曰く

「神よ、此の砂を以て敵軍の面を蔽ひ、其の陣列を亂さしめよ」

雷鳴の如き大音張り揚げて、敵軍に反響せしめた。彼のこの絶叫には敵も味方も共に戦慄した。そして恰も天使來つて彼等に應援するか如く見え、コレイシユ族は遂に敗走した。

彼は一種の英雄であつた。が、單なる地上の英雄ではなくして、常に彼の神と共に在り、神と共に活動する底の法界的英雄であつた。其の威力も單なる英雄的蠻威のみに非ずして、或る偉靈を直覺しての大威力であつた。

マホメットは單なる英雄でなかつたと云ふよりも、寧ろ只の人間では無かつたのである。彼は天の生める聖者の偉人の一人であつた。彼は人爵を欲せず、只天爵の上に其の光榮を認めて居つた。人間を超越せる特殊の一靈格として、地上に活躍したのである。當時の信徒が彼に對する態度は、恰も基督が其の信徒より神そのものとして仰がれた如く、彼に對し人間以上の崇敬を拂つてゐた。彼の部下に對する命令も、單なる軍隊の命令に非ずして、神の命を傳達し、神の擁護の下に活動せしむるものであつた。此の點に於ては、波斯王なども深く嘆美して居つたほどである。

天堂は劍の影にあり

之より先、コレイシユ族は彼を殺すべく衆議一決して、一部落毎に各一劍を揮ひ、彼を屠り去らんことを定め、夫々手配りした時、彼はこれを聞き知つた。窃かに家を脱して身を逃れんとした。追求頻りに到るに及んで、彼は或る巖窟に匿るゝと三日、僅かに

一命を支へつゝ敵情を覗つてゐたが、敵の偵察は愈々嚴密と爲り、嚴窟は遂に發見された。偶々巖孔に蛛の網の張れるあり。穴中には鳩の巢を作つてあつた爲め、コレインユ族の人々は之に入らんとせなかつたが、彼と共に匿れてゐたアブベケルは此時戰慄して「我等は唯二人のみ」と云つた。彼は之に答へて

『否々、別に第三者が我等と共に在る。即ち神である』

と云ひ、悠然として止まり、敵の去るを見て彼は逃れた。信仰のため、其の戦の前には彼は幾度か個様の運命を味つてゐる。そして彼は如何なる危険に遭ひ、如何なる悲運を味ふとも、この運命を甘受し、白刃をも履むの勇あるものでなければ、天堂には達し難いと云ひ、『天堂は劍の影に在り』と喝破したのである。

彼は冒險を好んだ。冒險そのものが神の道であり、天堂に入るの修行であり、彼自身の使命であると信じた。此自覺が彼をして英雄以上、只の人間以上の勇猛心と、大威力

を發揮せしめた唯一の素因である。『劍の影』に天堂を認むといふ、何ぞ其の言の深刻にして徹底的なるや。彼は最期に臨んでも、この精神だけは一貫して居つたことが分る。彼は其の部下に云つた。

『アラビヤから不信の民を驅逐し去るまでは爾曹願はくは爾曹の劍を其の鞘に納むる勿れ』

劍は實に彼の生命である。劍を通じて神の威力を發揮し、劍の閃きに依つて民衆を救ふ、夫れが彼の戰略であり、使命であつた。劍は天堂を開くの鍵である。神の爲めに流したる血は最も神聖なる意義を有し、神の審判の日に在つては、神の爲めに蒙つた處の傷は朱の如く輝き、麝香の如く香ばしく、其の失ひたる手足は天使の翼を以て補はるゝであらう。信仰のために奮闘するは斯くの如く幸福である。と、彼は劍の徳を頌してゐる。

絶對的權威の自覺

彼は曾て戦に敗れ、敗残の兵士を引き連れてメジナに歸つたことがあつた。其の時一婦人が敗軍を迎へ、彼等に問うて『わが父は如何にしたか』と云へば、彼等が『爾の父は戦死した』と答ふ。婦人重ねて『然らば我が夫は？』と問ふに『彼も亦戦死した』と云ふ。更に『わが子は如何？』と尋ねるに又答へて『彼も同じく……』と云ふのであつたが、婦人聲を勵まして『然らばマホメット師は？』と問ふに『彼は今尙生きて我等の中に在る』と、兵士等が答へたので、婦人の態度一變し、悲痛の色を打ち拂つて『善い哉、わが師マホメットさへ生存して居れば、我等自身の不幸何かあらん』と喝采歡呼する。眞に彼の本領を解するものは、一婦人でさへ斯の如き崇敬を彼に拂つてゐた。彼は『様にして、人の子、人の父を殺しつゝあつたにも拘らず、尙其の聲望を失はず、怨

恨を買はず、尊嚴を毀けなかつた。何が故に然りしかと云ふに、彼には人間の想像し能はぬ大自信大自覺があつて、自己の絶對的權威を肯定して居つたからである。彼曰く『神は屢々豫言者を地上に下して人心の復活を計り給ふ、是等の豫言者中、最も傑出したるものはアブラハム、モーセ、耶穌及我自身である、就中我自身は豫言者の最大なるものであつて、地上に眞の道を傳ふべき天職を持つて居るものである』
 斯の如く彼は自己の絶對的權威を自覺し、之を確信してゐたのである。『信は力也』彼は大なる信を有してゐたから、大なる力を現はし來つたのである。

マホメットの奮闘生活

彼は其の道を宣傳する爲めには、食を止め眠を廢することも屢々あつたほど、爾く熱心に奮闘し、よく精力を發揮した。而も彼の努力が全部殆ど無効に歸する場合もあつた

のである。斯かる場合は、彼と雖、幾分失望の嘆を發すべきかと思の外、奮闘の勢は却て幾倍し來るのが常であつた。民衆が擧つて彼を罵り、彼を排し、彼を迫害し來る時も、其れ等無情無感の民衆に對して一日も休止することなく道を説いた。聽く人なきに至つては石に向つてさへも説法したと云ふ。

會て何人も彼の説を傾聽するものなく、稍々失望の感を懷いて家に歸り、ベットに入つて暫し眠を取らんとした時、彼の熱烈なる宣教慾は尙彼をして安眠を取らしめなかつた。彼は夢中に神の暗示を聽いた。「ベットに入つて眠を貪らんとするものよ、起つて活動せよ、而して大いに説教せよ」と。彼は之を聞いて翌朝拂曉から飛び出した。元氣は前日に倍し、熱心は一層の度を加へて。

彼は戰を以て生涯を一貫した。彼の奮闘は一日も休止することなく、又休止することなく、不信の徒を掃蕩し終るまで、凡ての人を天堂に入らしむるまで、而して是れを能くせずんば死して已むまで。

名利の外に超然たり

彼の行動が、武裝的にして、英雄的の氣分に充つる處ありと雖、彼は單なる地上の雄者として起つたのでなく、神の子として天命を果すべく起ち、自己の絶對權威を確信して居つたのであるから、通常人間社會の英雄の如く利達功名の爲めに驅使さるゝやうのことは斷じてなかつた。唯その信する處の道の前に、死を賭して絶間なき奮闘を續くるの外何物の慾望も有り得べからざる處であつた。彼は其の伯父アブタリブに、彼の戰鬥を中止すべく勸告された時左の如き返答を與へた。

『たとひ右の手に太陽を與へ、左の手に月を與へて、予の企を止めんとするも、予は斷じて止めない、神が予を勝利の道に致すか、然らずんば予が其の爲めに死するまで』

太陽を與へやうが、月を呉れやうが、已むに已まれぬ只一筋の道、パトリックヘンリ
 ーならば『われに自由を與へよ、然らずんば死を！』と云ふ處、マホメットが此の言を
 爲す、蓋し當然至極の話である。神は萬能であるべき筈、神は天地の支配者たるべき筈、
 日月星辰、乃至草木國土、皆これ神のものであるべき筈、今彼が太陽と月を得て、神を
 喪ふことあらば、彼は凡てを喪ふの外はない。凡てを捨つるは太陽と月を捨つるよりも
 損失が大きい。是れ故に彼は太陽と月の好餌をも峻拒したのである。彼の慾望は大きい。
 彼は最大なるものを慾求した。最大なるものは唯一つ、それは神である。此の慾あれば
 こそ、地上の小慾は眼中に無い。名利の小成に安んずべくもない。
 唯彼の劍、武裝の威力それが果して神の意であるか否か、血の洗禮、それが果して神
 の好む處であるか否かに就ては、研究の餘地大いに存することを思ふのであるが、今は
 彼の宗教、彼の哲理を吟味するを以て主たる目的とする場合でないから、論評の自由は

保留しておく。我等は彼に於て、マホメット式大威力生活の一斑を知れば足る。

三日 蓮 論

日本佛教と威力生活

威力の種類を世界に求むれば大凡そ既述の通りにして、英雄には英雄式、金権者には
 金権者式、哲學者には哲學者式、宗教家には宗教家式に夫々分に應じたゞけの威力あり、
 生活あり、而して後世に及ぼす教訓の甚深なるものがある。別して之を評價するならば、
 英雄や金権者等の威力は、主として物質的、現實的範圍に止り、其の威力の自覺ましき
 ものある割合に、人心を根本的に革新せしむるに足るの大威力とは爲り難く、哲學者の
 威力主義も未だ超人間的威力の發揮を恣にするには物足らず。宗教家の偉大なる模型に

於て、始めて人界と法界に亘る無限的大威力の上に立つて生活せるの事實を看取し得るのである。乍去、以上挙げられる威力者中に於ても、尙我等が要求しつゝある最大にして且つ徹底せる第一威力、即ち其の輪廓の上より見ても、内容の上より見ても、反映の上より見ても、一點遺憾なきものは遂に發見されなかつた。今や其の包容力に於て比肩すべきものなき、宗教中の宗教、諸の神の上に一段高く秀で、一切の法界と人界とを支配する佛教に於て之を求むるの外はなくなつた。

大覺世尊釋迦牟尼佛を出現せしめた本家の印度は彼が如き状態に在つて、初期時代禪定堅固の諸菩薩を認むるの外、我等の要求せんとする威力主義的模型を發見すべく、餘りに幽玄に過ぐる。支那も亦偶像的時代に於ける法門の繁榮振、乃至經論評釋の研究振を認むるの外、我等の要求を充たすに足るの活動的偉器を發見するに苦しまざるを得ない。佛教が人間に翻譯されて、法界の精神を以て直ちに人間生活の繩規とし、人法一如

と爲つて、宇宙の大偉靈と人間の個性との調和が取れるやうに爲つたのは如何にしても日本佛教に入つてからの問題である。

其の始め聖德太子が三寶を興隆し、王法佛法の冥合を理想して、智識と信仰の一致を計らんとせし頃より佛教は漸く生活に觸れて來たと云つても好からう。聖德太子は政治の上に立つても賢明なる宰相の器を具へ、信仰の上に於ても佛教渡來以來最初の正信者であつた。而して太子は其の生涯に於て潑刺たる奮闘生活を爲したと云ふには非ざらざれども、尙法の如く、當時既に大威力主義を宣明して居つたことは『重惡は即ち勢力を以て折伏し、輕惡は即ち道力を以て攝受す』の一語に現はれてゐる。

傳教大師が南都六宗と戦ひ、論講、法戰、御前對決等に依て教權の威力を發揮したるは、佛教的威力主義の歴史上極めて顯著なるものであつたが、大師の後に叡山の圓教も

眞言を混入し妥協して、法華三昧の堂上に念佛を唱へるの奇觀を呈するに至り、教相が何時しか灰色と爲つて仕舞ふ。弘法大師の博學多才、加ふるに機略縦横で、一世を風靡すると同時に、佛教は日本の人師に依て改造されたる一種特製のものとなり、夫れが更に天臺の宗學に浸して、いよ／＼多角的の宗教と爲つたのであるから、純正教權的威力の發揮は一時匿るゝの已むなきに至る。

威力は遂に脱線した。坊主は鎧を着て山を出た。殺伐、淫蕩、俗家の俗物も三舍の所謂豪傑達が輩出する。中には相當の學匠もあり、藝術家もあつて、一種の文華を産出したこともあるが、這は佛教の根本大精神とは少しく距離のあるものであつた。

荒坊主は權力を養ひ、蠻威を揮ふことによく努めたのである。富を作つて金權の威力を揮ふことにも勵んだ。是れが爲めには、彼等は其のお手のものであるのである處の迷信鼓吹をも試みた。金を慾するものにも、子を求めんとするものにも、戀を求むるもの

にも、乃至憎き人を呪はんとするものにも、夫々都合よき偶像を提供し、若くは呪文を唱へ、祈禱の行を爲し、俗衆の煩惱を發展せしむる爲めに、凡らゆる手段を講じ、之によりて法外の利得を貪り、蠻威發揮の用に備ふるのであつた。眞言秘密など云ふ千里眼や催眠術もいよ／＼流行を極めて来る。法門の景氣即ち頗る盛なものであつたが、是れは彼の小乘教的厭世退嬰の哀調と好一對で、自然主義が勝つても、厭世主義が勝つても、佛教本來の面目とは全然没交渉、只史上の汚れたる數頁を止めたに過ぎない。若し夫れ武門横暴の世と爲り、承久の廢立沙汰と爲つては、佛法も白法隱沒、黑法發展の極みで、日本一同は、只それ鐵火の巻であつた。

この頃より禪宗の勃興もあり、武人の好奇心に投じて、參禪三昧を行するものが續々と現はれ、一種超脱したる威力主義も行はれたが、『地藏畢竟空、小便畢竟空』で、地藏の頭に放尿一番、佛、菩薩何かあらんと云ふに至つて、這の威力も矢張り脱線の感を

免れない。

一向専修の易行門こそ末法衆生の唯一法だと喝破し、呼號した法然上人、彼は燎原の勢を以て低級社會の人心を風靡した。所謂捨閑閑拋で、深いもの、高いもの、六ヶしいものは捨て、仕舞ひ、頗る簡單にして成佛即席の念佛唱名、是れに限ると棚から牡丹餅を投げたやうなる傳道振、それが案外氣受けよく、貴族も百姓も一齊に馳せ参すると云ふ大繁昌を來すことゝ爲つた。

別に又、その昔印度の出家が守つた戒律専門の罐詰式行法も流行して來る。行儀よく、節持甚だ周密に、淨くして上品に、俗物の生活とは飛び離れた仙人的態度、それが又存外有りがたさうに見えるので、矢張り相當の勢を保つてゐた。殊に北條氏の代と爲つて、鎌倉の極樂寺なる良觀房の如きは、全く活如來としての崇敬を集めてゐた位である。

以上は多く消極的威力を以て立つてゐたものであるが、茲に我等が特別なる意味に於

て興味を惹くものは、同じく易行専修の門に出でたる親鸞上人だ。彼は法然房の門下で、彌陀本願の念佛唱名を以て其の行法としたる點に於て、何等師法然の上に出でたる筈もないが、念佛者流の修行の態度未だ純粹専修的ならず、自力を雜へた半他力の不徹底なものであることを遺憾とし、師法然の眞意を發揚するために絶對的他力行、専修の専修たる所以を明確にせざるべからずと爲し、兼ねて時代の腐敗に憤慨し居たることゝて、其の説法の調子も革新的氣分を漲らしてゐた。故に彼は時弊を風諫するに動もすれば、激越せる説法を須うることもあつたのである。其の代表的なる一齣は、『教行信證』の末文にある

『竊以、聖道諸教、行證久廢、淨土眞宗、證道今盛、然諸寺釋門、昏教兮不知眞假門、戸、洛都儒林、迷行兮無辨邪正道路、斯以興福寺學徒、奏達太上天皇今上聖曆承元丁、印歲仲春上旬之候、主上臣下、背法違義、成忿結怨』

である。這は親鸞が師の法然の流罪に憤激せる餘り發した激語で、他には殆ど類例なき痛烈の文であるが、彼の生涯を通じて試みられた説法振は、大體に於て矢張り消極的、攝受専門的のものであつたらしい。即ち其の威力は最も素直に揮はれたのである。他家に對する態度と雖、決して戰鬥的のものでは無かつた。彼の眞精神を最もよく理解し發揮したのは蓮如上人であるが、蓮如も「諸宗諸法を誹謗すべからず」と教へた。所詮眞宗の態度は非威力的であつたのである。

日蓮の威力的修養

佛教そのものゝ内容に包蔵せる威力的價値は、今更吹々するまでもなく、古今東西に發揮された凡ての威力を超越した絶對無限のものであるが、日本宗門史上に於ても、同じく佛門の中に生活しつゝあるに拘らず、差して大なる威力も發揮し得ずして終れるも

の甚だ尠からず。既述の諸聖皆夫々相當の威力は發揮し得たるも、未だ我等を満足せしむるだけの徹底威力生活を試むるものはなかつた。獨り本化聖日蓮のみは、我等の希望し若くは理想しつゝありし處を一超して、殆ど信じ難きまで雄大にして剛健なる徹底的大威力生活を爲し、古今の威力主義者を豆の如く小ならしめ、天地六合一擲の猛威を揮つて、末法萬年に其の範を垂れた。彼が何の故を以て爾く雄偉なる威力を發し得たであらう。如何なる修養あつてか、克く彼が如き無碍自在の猛威を恣にすることが出来たであらう。是れ亦殆ど信するに難き處、凡夫の想像する範圍にては所詮之を理解し説明することは出来ぬ。

茲には聊か彼が威力的修養に關して自ら説明し、他を鞭撻したる證言の根據に基き、我等は彼の全生活を貫ける威力的生命を直覺して見たいと思ふ。

彼は事に向つて、其の緊張力を緩ゆる場合を絶無にしてゐる。『力』の説明を爲して

曰く

『師子王の前三後一と申して、蟻の子を取らんとするにも、又たけきものを取らんとする時も、勢を出す事は、たゞをなじき事也、日蓮守護たる處の御本尊をしたゞめ参らせ候事も、師子王に劣るべからず、經に云く、師子奮迅之力とは是也』

あゝ師子王は、蟻一疋捉えるにも、乃至兎を取るにも、象を屠るにも、力の發揮は同様に用ふる。容易く爲し得らるべく見ゆる仕事にも、たゞ全力を傾注して、些のスキも見せず、師子奮迅の力をのみ常に發すべしと云ふ意義だ。これある哉これある哉。『涅槃經』に曰く

『善男子よ、大師子の香象を殺す時、皆其の力を盡す、兎を殺すも亦爾なり、輕想を生ぜざるが如し、諸佛如來も亦復是の如し、諸の菩薩及び一闍提の爲めに法を演説したまふ時に、功用二つ無し』

げに功用に二つはない。豈たゞ師子王のみならんや。眞なる力の發揮を爲さんとせば、天下の事は皆全力的でなければならぬ。如何なる地位にあり、如何なる天職を有し、如何なる場合に遭ふも、其の爲さざるべからざる責任の履行には、力の全部を傾け盡し、仕事の前に緊張力を失ふことがあつては駄目だ。

月給の範圍内で程よく勉強する現代の横着處世術に慣れた者から見れば、他愛なき仕事に其の全力を傾け盡すことの頗る非打算的なるを思ひ、精力經濟の上より之を否定し去らんとするの傾向ある、寔に尤も千萬の話、而も『程よく』働く流儀を以てして、却て『賢き人』と賞でらるゝの理由と爲るに於ては、我等亦何をか曰はんや。只惟ふ、寄席藝人の修行でも、水の呑み方、扇子の持ち方にまで眞剣に、師の法則を守つて、凡ての藝風に全力傾倒的の魂を入るゝものは、よく一代の大立物と爲り得ることはあるが、場に登つて、成るべく其の聲を儉約し、若くは疲勞を氣遣ひつゝ、『程よく』力を罩めて、

當日の報酬と權衡を取らんとする流儀の藝人にして、深き感動を觀客に與へ得た、めしはない。

我等之を第一流の落語家に見る。彼は人を笑はすことのみ苦心し、自慢する商賣だ。人を笑はすことほど他愛もない藝はない筈、要するに不調和な滑稽趣味を鼓吹して、觀客に腹を抱へさせれば可い。只それだけのことである。而も只それだけのことが月並の努力では却々以て堂に入り難きのみか、二遍三遍同じ顧客に見える時は、大抵の可笑しき話も、一向につまらぬ月並の滑稽と爲り、敢て顔を崩すにも及ばぬやうなものとする。偶々藝風に威力あるもの、滑稽談を聴くに、先づ其の態度に於て、一寸のスキも見せない。他の藝人と同じ藝題で同じ言葉を操る場合でさへも、殆ど彼のみの專賣的藝題、彼のみの専用語であるかの如く、深刻なる印象を與へ、堪へ難き可笑味を與へる。彼は僅かに其の身振を示し、僅かに其の聲を發して、或る滑稽を描寫する場合にも、其の額に

シン／＼と熱汗を滴らしてゐる。彼の小さな身振、小さな聲の中にも、武藝者が眞劍の勝負を試みんとして、敵と對峙した時の如き緊張力があるのである。

力なる哉、力なる哉。人を笑はせるだけの事にも只それ全力を傾倒すべきもの、況や兎を殺し、虎を撃ち、象を屠るに於てをや。更に況や人生の戰場に在つて、凡らゆる魔軍と接戦するをや。

『日蓮が門下は、晝は暇を止め、夜は眠を斷ちて、此のことを案ぜよ、一生空しく過して、萬劫悔ゆることなかれ』

精力主義、奮闘主義、威力主義の出發は實に此の一語に存す。根本力、大威力の發揮は是れから始まる。さればこそ、其の戦線に起つては

『日蓮魁したり、若黨共二陣三陣つゞいて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳教にも超えよかし』

『大陣すでに破れぬ、餘黨はものゝ數ならず』

等の軍令をも發することゝ爲る。若し夫れ法の如く經を讀まんとすれば、口にのみ讀まず心にのみ讀まずして、身を以て讀まなければならぬことを誨へ、身を以て讀むと云ふ意味は、身命を捧げて、何時でも經王の爲めに死を賭して戦へと云ふにある。

『日本國に法華經を讀み學する人これ多し、人の女をねらひぬすみ等にて打ちはらるゝ人は多けれども、法華經の故にあやまたるゝ人は一人もなし、されば日本國の持經者はいまだ此經文にはあわせ給はず、唯日蓮一人こそよみはべれ、我不愛身命但惜無上道是也、されば日蓮は日本第一の法華經の行者也』

げにや命より惜しき寶はない。その一番惜しき寶をお布施として、無上道を買ふと云ふ。高價なるものは無上道である。その最大高價の道に達せんとして努力奮闘し、活躍猛進するの修行、夫れが取りも直さず本化式威力的修養法である。

法敵に對する威力

初めから『自己そのものを得ん』として焦慮る者に於て、豫定の如く『自己そのもの』を得た者は一人もない。只無上道を得んとして、身命を布施する者は皆無上道に入り、無上道に入るは體て『自己そのもの』の本然の性を得る所以、茲に始めて『達する』ことが出来るのである。

達すれば、道は是れ無上道、力は是れ根本力、大威力生活即ち是れより起るのである。日蓮は大威力を發揮しつゝ、前代未聞の盛なる生活を營んだ。當時末法に入つて、白法は隱没し、邪義謗法天下に充ちて、或は經王を詈り、斥け、傷け、各々何れかに偏執して、懦弱限りなき權門、小乗の輩、頻りに大聖日蓮を迫害し、誣告して寧日なからしめたが、日蓮は敢て殊更之に對抗し、強ひて喧嘩を賣らんとする譯ではなかつた。

『同じく信を取るならば、又大小権實のある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道の一乗をこそ信すべけれ、持つ處の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまされり、……然るに人此理を知らず見ずして、名聞孤疑偏執を致せるは墜獄の基也』

で、彼等偏執者、邪信者の心機を一轉して、本化正信の一道に導かんとの念願、それが發して、折伏と爲り、破權と爲り、大闘諍と爲つたまでの話である。人爲的の戰爭を開始したのではない。天の命する處を、命のまま、有りの儘無遠慮に斷行した、その反動が法敵の簇出、大難の頻出と爲つたのである。

即ち殊更に喧嘩を賣らずとも、法の命する處を、法の如く行すれば、『如來現在猶多怨嫉況滅度後』であるから、已むに已まれぬ大闘諍は天下に起る。威力の發揮に於てか、大いに意義あるものと爲り、目的を達するまで、教權を徹底せしむる迄、飽くなき奮闘

努力、大威力生活を以て進むより外に道はない。威力を徹底せしむれば、さて如何なる結果を生ずるか。『如說修行鈔』の名文を見よ。

『今の世に闘諍堅固自法隱沒なる上、惡國惡王惡臣惡民のみ有て正法を背きて邪法邪師を崇重すれば國土に惡鬼亂れ入りて、三災七難盛に起れり。かゝる時刻に日蓮蒙佛敕、此土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ、任經文權實二敎のいくさを起し、忍辱の鎧を着て、妙敎の劍を掲げ、一部八卷の肝心妙法五字の旗を指上て、未顯眞實の弓をはり、正直捨權の箭をはげて、大白牛車に打乘て、權門をかつばと破り、かしこへおしかけ、こゝへおしよせ、念佛眞言禪律等の八宗十宗の敵人をせむるに、或はにげ或はひきしりぞき、或は生取れし者は我弟子となる、或はせめ返しせめをとしすれども、かたきは多勢也、法王の一人は無勢也、至今軍やむ事なし、法華折伏破權門理の金言なれば、終に權教權門の輩を一人もなくせめをとして法王の

家人となし、天下萬民諸乘一佛乘と成て、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を不碎、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死之理顯れん時を各々御覽ぜよ、現世安穩の證文不可有疑者也』

威力の發揮も、抵抗の強度に比例して益々猛威と爲る。爆弾は抵抗物の力に隨て其の爆破力を増す。敵は大勢、味方は無勢なる時、始めて徹底せる威力主義が行はれる。徹底威力の發動して、遂に夫れが最後の勝利を贏ち得た場合は、『現世安穩の證』疑あるべからざるに至る。これが理想の實現、威力主義の『達した』る境涯で、茲に達せざる間は、威力生活は一日も止むべきでない。

信徒に對する威力

『佛法を行する人あつて、謗法の惡人を治罰せずして、觀念思惟を專にして、邪正權實をも簡ばず、詐つて慈悲の姿を現ぜん人は、諸の惡人と俱に惡道に墮つべし』

佛道の信を得ると雖、邪を見て之を撃つことを爲さず、獨り靜かに觀念して、仙人的逸奔の生活を爲す者、即ち攝受専門の行に偏し、己れ一人のみの、寸前安地を希ひ、同胞の昏迷流轉せる果敢なき運命を看過し居るが如きは、常に修行の法を誤るのみならず、謗法不信の徒と同罪墮獄の人と爲る。と、嚴正の誡め、夫れが折伏立行の本格式化導の大精神であり、『如說修行』の大戒である。罪人の所在を知つて之を官憲に告げざるは、罪人隱匿の罪に當る。之を其の筋につき出して、社會の平和を計る、これ眞の民だ。若し人あつて、我こそ正法の信に入つたと云ふものありと雖、彼が隣人の謗法を知つて、之を責むれば怨を蒙る、敵を求むる、吾身危うしと恐怖の念に襲はるゝやうでは、未だ眞なる信者と許されない。信念の前には何物の權威も無力なるべき筈である。